
ギンガムチェックの夜空

松嶋ネコチロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ギンガムチエツクの夜空

【Nコード】

N5672V

【作者名】

松嶋ネコチロウ

【あらすじ】

きつとわたしは、このギンガムチエツクの夜空のしたで生まれたんだ。むずかしいこと、押しつけがましいことは何も書いていません。ひとりの少女の、しずかでちょっと苦い青春をつづりました。

scene 1：初めての生理

初潮をむかえた中学一年の秋、わたしは命について考えた。

朝、とある居心地の悪さをおぼえてトイレに行ってみると、下着の裏地がぼつと赤くなっていた。ああ、ついに来たな、と思った。わたしは、自分でも信じられないくらい、そういうおちついた気分でした。

こういう、女の子だけの生理現象があるんだって知ったのは、たしか小学校四年生のとき。

保健体育の授業で、安山けい子先生がとつぜん、「女子のみんなは、これから保健室にあつまってください」と言った。男子たちはいささか不満そうだった。きっとテストの答え教えてもらうんだぜ、女ばかりずるいぞ、えこひーきだ。そんなことをぶつくさと。

保健室に行くとき、後ろの席の男の子がわたしの服のすそを引いた。名前は道彦くん。

「もし、こんどのテストのヒントとかだったらさ、あとでこそつと教えてくれよ」

わたしはにやりと笑って、道彦くんにだけこっそりピースサインを送った。

授業が終わったあとの昼休み、廊下の奥で道彦くんに呼び止められた。

「どうだった。どんなヒントもらったんだ」

そう尋ねられたとき、わたしは真っ赤になってうつむくことしかできなかった。だって、恥ずかしくて言えるわけがなかった。たぶん、けい子先生はそんなつもりじゃなかったんだろうけど、わたしには生理がなんだか、ヒワイに思えてしまったのだから。

あのころと比べれば、わたしはずいぶんましな子供になったと思う。ましな子供とはつまり、ものごとの分別がつく子供のことだ。わたしは赤くなつた下着に、ふん、と鼻で笑つてみせ、ついでに「やれやれ」なんて独り言までつぶやいてみせた。まあ、これもひとつのさだめじゃないか。

部屋に戻り、学習机の奥から半年前に友達といっしょに買った生理用品を探りあてた。家族に見つからないうちにお風呂場へ行つて、体と下着を洗うことにした。寒くなる季節だったのでお湯の温度をすこし上げた。ちょうどいい目覚ましにもなる。

さて、下着を洗おう、そう思ったところで、自分の手がふるえていることに気づいた。お腹の内側で、ぐいぐいと締めつけられるような痛みがあることも、そこでやっとわかった。でこぴんで手の甲をぴしつとやってみただけど、ふるえは止まらなかった。

強がっていても、わたしだって不安なんだな。

そういう風にすぐに自覚できてしまうところも、やはり分別のつく子供なのだろう。

その日の体育の時間、わたしは貧血を起こして保健室のお世話になった。

初めての生理は、たっぷり六日間続いた。

自室の中、ナプキンに汚れがついていないことを確認すると、わたしは仙人のような神聖な心もちでベッドに転がった。あるいは、初戦を勝利でおさめた武士みたいな心身状態だっただろう。勝つて兜の緒を締めよ。そういうことだ。

そこでわたしは、命について真剣に考えてみることにした。だって、わたしの身体はもう、命を授かるライセンスを受け取ってしまったのだから。いま考えずに、いったいいつ考えろというのだろう。

わたしは自分のお母さんを写真でしか見たことがない。一応いまは義理のお母さんがいるけど、わたしはお義母さんのことを『ゆりちゃん』と呼んでいる。他の子のお母さんよりは断然若いし、雰囲気も親戚のお姉さんみたいだし、だからやっぱり、『お義母さん』よりも『ゆりちゃん』だ。

ゆりちゃんに初めての生理が来たことを伝えると、ゆりちゃんは「お赤飯を炊こう！」といきり立った。変なところでおばちゃんみたいだなと思ったが、口には出さなかった。わたしの苦笑いにゆりちゃんははっとして、

「やだなあ、あたし、おばさんみたいなこと言っちゃってる」と、ちよつと恥ずかしそうにしていた。でもわたしは、気を使っ
てこう言っただけだ。

「ゆりちゃんって、制服着たらフツーに高校生に見えそうだよね」
ゆりちゃんは真に受けて、本気でうれしそうにしていた。かわい
いな、とわたしは思った。

晴れた昼間に近所の河原をあるいていると、涼二が水面に向けて石を投げていた。水切りでもして遊んでいるのかなと思ったけど、そうじゃないみたいだった。涼二は、力まかせに石を投げつけるだけだった。

「涼二、なにしてるの？」

涼二はびくつと肩をふるわせて振り返った。むっつりした瞳がわたしを見つめる。

「麻衣みたいなガキには、おれの気持ちはわかんねーよ」

変声期を終えた中途半端に太い声で、涼二はわたしをののしった。それから彼はまた石投げを再開する。

涼二とわたしは異母兄妹だ。奇妙なものだと思う。ゆりちゃんと涼二は実の母子なのにあまり仲がよろしくない。けれど、ゆりちゃん
とわたしは直接血のつながりがあるわけじゃないのに姉妹のよ

うに仲良しだ。

きつと、涼二が反抗期なのがいけないんだ。でも、それも仕方のないことだなとわたしは達観している。涼二は中三だし、受験だし、むつかしいお年ごろなのだ。

「どつちがガキなんだか！」

よく聞こえるよう大きな声で言って、わたしは逃げるようにその場を去った。

scene 2：ギンガムチェックの夜空

家出をしよう、そう思い立ったのはそれから三日後のことだ。

家出というと、たいていはなんらかの不幸にさいなまれた結果ゆえの行動なのではないかと思われがちだけど、わたしにいたってはそんなことはない。というか、多くの家出娘は、なにかしらの希望を持って家出するものなのだ。家出をネガティブなものだと決めつけるのは、そもそもの思考停止なのである。わたしはそう思う。

わたしの家出の目的は、ありていに言えば自分探しだ。命とはなんぞや、を探す旅とも言える。

ちようど明日は土曜日だ。みんなが寝しずまったところで、わたしは行動を開始した。

さっそく、クローゼットから布の手作りバッグを取り出した。むかし、父方のおばあちゃんに作ってもらったもの。灰色と黒と黄色のギンガムチェック柄の布地で、一見地味だけど、これがまた丈夫で長もちしている。

貯金箱をひっくり返し、おもにお年玉などで貯めたお金をぜんぶお財布に入れた。枕と掛け布団は背中のリュックサックに入れた。冷蔵庫からは板チョコを数枚。それは布バッグの方に入れる。戸棚にあったお菓子もひとつ残らず持っていくことにした。これだけあれば、三、四日は生きていけよう。わたしは満足してうなずいた。

「なにしてんだ」

パジャマ姿の涼二が台所にやってきた。わたしはとくに驚くこともなく、誇らしげにあごをくいっとあげた。

「わたし、これから家出をするんだよ」

「なんだと。それはいいことだな」

ばかにされると思ったが、涼二の反応は意外だった。

「おれもついてっていいか？」

わたしはちよっとうれしくなった。ここだけの話、ひとりぼっち

はけっこう不安だったのだ。

「いいよ。ただし、ゆりちゃんとお父さんを起こさないよう、じゅうぶん注意して準備するんだよ」

涼二は、おう、と意気込んで、あわてて口をふさいだ。

この世には、わたしたちを非現実的な世界へとみちびくものが多数存在する。それはコンサートだったり遊園地だったり映画館だったりするわけだけど、旅や家出もそのひとつだとわたしは思う。

わたしが考えるに、そういつた非現実的な場所へ向かう道中そのものも、非現実的世界の片鱗だと思う。

たとえば、いまわたしがこうして、深夜バスに揺られている瞬間もそうだ。目的地への到着を黙々と待つわたしと涼二は、ふだんでは考えられないくらいそわそわしている。まだ移動中には違いないのだけど、わたしたちの心には早くも未見の地が見えているのだ。

そう考えれば、この深夜バスもすでに非現実の世界を走っているということになる。突き詰めれば、家出をすると決めたあの瞬間から、わたしたちの世界はもう現実から非現実へとシフトしていたのだろう。

「なあ麻衣、おれ、なんだか興奮しておしっこしたくなってきちゃったぜ」

わたしは黙って、バス後方にある簡易トイレのカーテンを指した。こんなときに下品なことを言うひとは、大きらいだ。

駅に到着して、路線を三本も乗り換えた。終電にぎりぎりで間に合い、なんとか乗り込む。わたしたちは南へ向かって、ぐいぐいと引っ張られた。終着駅には待望の海がある。

駅を降りて二十分歩くと、砂浜が見えてきた。わたしたちはどち

らともなく駆け足になって、競うように海を目指していた。

浜辺にはシャッターの閉じられた海の家が数軒並んでいた。そこを縫うように砂浜へ突撃する。

「うおー」

涼二は叫んで、砂浜に頭からつつこんだ。わたしは先走らず、余力を持って波打ち際まで走っていく。サンダルをその辺にほっぽりだして、海水に足をつけた。

「わたしの勝ち！」

涼二は砂だらけの顔を上げて、眉を八の字にした。

「おれは、砂浜がゴールだと思っていたんだがなあ」

「海に来たんだから、海がゴールに決まってるでしょ」

ちえつと舌打ちして、涼二はその場に仰向けになった。そして、おお、と感嘆の声をあげた。

「こりゃいいや。おい麻衣、こつちに来て、おれみたいにしてみる」
言われたとおりに、わたしは涼二のそばで天をおおぐように寝っ転がった。涼二とわたしの頭を中心に、二人の体で時計の長針と短針を描く。たぶん一時二〇分くらいかな、と適当に思った。

頭上では満天の星空が広がっていた。ほとんど黒い部分に分からなくなるくらい、光の玉が群をなしている。

わたしは布のバッグから一枚の写真を取り出した。すでに亡くなったわたしのお母さんの写真。シンデレラみたいな格好をしたきれいなお母さんと、かしこまってカチコチになったお父さん。結婚写真を縮小して、手のひらサイズにしたもの。

わたしは、お母さんやお父さんやゆりちゃん過去のあまりよく知らない。そして、知りたいとも思わない。わたしより涼二の方が先に生まれたのに、どうしてお父さんは最初にゆりちゃんと結婚しなかったのかとか、お母さんはゆりちゃんや涼二のことを知っていたのかとか、そういうややっこしくて暗そうな過去は、知らない方が楽なのだ。

でも、ちつとも気にならなかったといえばうそになる。わたしは

間違いなく、この写真のお母さんから生まれたのだ。何度かお父さんに、お母さんのことを尋ねてみようとしたこともあった。ただ、今までずっと聞きそびれていたってだけで。

今のわたしは、正真正銘のからっぽだ。もちろんいい意味で。こうして、いま生きている瞬間さえ楽しければ、それは幸せだということなのだから。

わたしは眼鏡をはずして、不明瞭な夜空を見上げた。もちろんのこと一気に視界が悪くなる。それと同時に、わたしは新たな発見をした。

星の大群はぼやけきり、光をいつそう膨らませて空を支配している。もともと光で満ちていたその夜空は、さらに大きく光点をひらいてみせ、わたしに網目状の模様を連想させてくれるのだ。

ギンガムチエックだ、とわたしは思った。

おばあちゃんが作ってくれた布バッグと比べてみる。思ったとおり、この夜空とよく似た柄具合だった。ブラック、グレー、そして下地を彩るあざやかなイエロー。それがいくつも折り重なり、お互いを尊重しあっている。

「どうしたんだ麻衣、にやにやしちゃって。変なの」

「涼二には、おしえない」

砂の後頭部をつけて、裸眼で夜空を見上げた。

わたしは確信する。

きっとわたしは、このギンガムチエックの夜空のしたで生まれたんだ。

scene 3：親友のクミカ

クミカはわたしの親友だ。出会いはたしか小学五年生の春。彼女は、わたしたちの小学校に転校してきた。

クミカは、最初はぜんぜんクラスになじめなかったみたいで、いつもひとりぼっちだった。それで、陰で女の子たちから『市松人形』って呼ばれていた。昭和のおかっぱみたい髪型だったし、ぼつ、ぼつとしたちっちゃな目鼻だちも市松人形そっくりだった。そしてなんといつても、クミカの名前は『市松』だったのだ。

ある日、放課後になると、わたしは図書室に本を返しに行った。わたしは友達の利恵といっしょだった。

クミカは図書室のすみっこで心理占いの本を読んでいた。利恵はクミカを指して、ぷつ、とわらったけど、わたしはクミカのことが心配になった。今までほかの子たちと調子をあわせてきたけど、ほんとうはわたし、ひとりぼっちでいる子を見すごすなんて、頭皮じゅつの毛穴から空気がぬけちゃうほどガマンならんという性分だったのだ。

わたしがちかづくと、クミカは雷にでも打たれたみたいに体をびくつとさせた。まばたきをいっぱいして、いかにも自信なさげ、という感じだった。

「占いが好きなの？」

クミカは数秒間ためらってから、こく、とうなずいた。

「じゃあ、わたしのこと、占ってみせてよ」

利恵がわたしの腕をちよんとつついた。利恵は「こんなへんな子ほつときなよ」という顔をしていた。わたしはそれを無視した。

「クミカ、はやく占って」

クミカは、からかわれたり、しかられたりするときの表情をした。クミカは心理占いの本をばらばらとめくって、口を開いた。

「お、おもちゃ屋さんにてかけたあなたは、ふと目についたお面を手にとりました。さて、それはどんなお面？ A、正義の味方。B、鬼。C、能面。D、ピエロ」

クミカの声は小さくてきれいだった。当時テレビでやっていて、魔法少女アニメのピンクの声によく似ていた。

「Cの能面」とわたしはこたえた。

「Cとこたえたあなた。あなたは、いつも笑顔がすてきなひと。誰にでもやさしくて、困っている人を見ると、助けたくてしょうがなくなっちゃうひとです」

利恵がわたしの肩をつついて、「あたってるじゃん」とからかった。

「ねえ、あたしのことも占って」

利恵は気をよくしてクミカに要求した。クミカはまた、あわててページをめくった。

「あなたはいま、崖からおちそうになっていて、まさに絶体絶命です。でもそこでちょうど、助けしてくれるひとがあらわれました。さて、それはどんなひと？ A、テレビタレント。B、学校の先生。

C、知り合いのお兄さん。D、学校の男子」

みえみえの占いだな、とわたしは笑いそうになってしまった。でも利恵は真剣に考えているみたいだった。

「Dの、学校の男子、かなあ？」

「この占いは、あなたがいま恋している相手を当てる占いです」自分でえらんだ占いなのに、クミカはすごく恥ずかしそうに言った。

「Dとこたえたあなたは、学校の男子のだれかに恋をしていますね？」

利恵は「わっ」とおどろいた。

「すごい、当たってる！」

わたしも別の意味でおどろいて、おもわず利恵にたずねた。

「利恵、だれのことが好きなの？」

「うんとね、道彦くん」

利恵は照れくさそうに鼻頭をかいた。わたしはちよつとシヨックだった。わたしも、道彦くんのが気になつていたのだ。

「すごいやクミカ。ほんものの占い師みたいだね！」

利恵はよろこんだ。ばかだなあ、とわたしは思った。この占いをつくつたのはクミカじゃなくて、この占い本をつくつたひとなのに。それからわたしたち三人は、外が暗くなるまで占いであそんだ。

クミカはいろんな占いをわたしたちに教えてくれた。手相占いとか、人相占いとか、タロットカードとか、いろいろ。クミカが占い好きなことを、わたしはそこではじめて知った。

それをきっかけに、クミカは徐々にクラスになじんでいった。笑顔のクミカは、よく見るとすごくかわいかった。『市松人形』だなんて、もうだれも言わなくなった。

利恵も道彦くんのが好きだと知つて、わたしはずつと心の中でもやもやしていたけど、六年生進級と同時に道彦くんが東京に引っ越してしまつて、利恵へのもやもやもすつきりなくなつてしまつた。

中学二年生になつた現在のわたしは、先日クミカからもらったサボテンをぼうつとながめながら、そんなクミカとの出会いを思い出していた。

そのサボテンは自室の出窓のふちにかざつてあつた。丸っこい形のサボテンが三本、お団子みたいに身を寄せあつて鉢のうえで固まつている。

そういえばしばらく水をあげていないな、とわたしは思った。わたしは小棚のうえにあるプラスチックじょうろを手にとつた。サボテンといえども、一、二週間に一度は水やりをしないと枯れてしまふのだ。

じょうろに水を入れてこよう、そうして部屋を出ようとしたところで、ちょうど涼二がドアを開けて入つてきた。

「漫画をかえしに来たぞ」

涼二は高校一年生になっていた。受験を終えたばかりなので、彼は暇をぞんぶんに持て余しており、最近わたしの部屋から無断で漫画を持っていくのだ。

わたしは漫画をかすめとった。

「勝手に借りないで。あと、ちゃんとノックしてから入って。でも、ノックしてもわたしが『入っちゃだめ』って言ったら、ぜったいに入ってこないで」

「やれやれ、反抗期だなあ」

涼二は肩をすくめた。ついこの前まで反抗期だったひとには言われなくなかった。

「おや麻衣。そのサボテン、だれからもらったんだい？」

「クミカだよ」

「クミカってだれだ？」

「わたしの友達のクミカだよ」

涼二は、ふうん、とたいして興味もなさそうに相づちして言った。

「じゃあ、そのクミカって子に伝えてくれ。おれもサボテンがほしいとな」

「涼二にはくれないと思うよ。このサボテンは、クミカとわたしの友情のあかしだからね」

わたしはぴんと胸を張って言ってやった。涼二はまた、やれやれ、と言ってわたしの部屋を出ていった。

ほんとうのことを言えば、クミカなら、わたしの兄もサボテンをほしがっていたと頼めば、もう一つくらいはくれそうだった。でもわたしは、涼二にわたしたちの友情海域を汚されなくなかったので、クミカには涼二のぶんをねだらないことに決めた。

クミカとわたしは、中学生になってからずっと『エコ委員』に所属している。

エコ委員とは、クラスのみんなからペットボトルのふたや缶のプラタブをあつめたり、節電のために教室の電気をこまめに消す役割を持つ委員だ。クミカは気の利く心やさしい女の子なので、まさにエコ委員はぴったりなのだ。わたしはたんに、クミカにならってその委員に在籍しているだけだ。

放課後、わたしたちは、みんなからあつめたペットボトルのふたを屋外洗面台で洗った。ひとつひとつ丁寧に手洗いして、ざるに入れて天日干しにする。面倒くさい作業だったけど、クミカは一生けんめい、たのしそうにふたを洗っていた。

「ねえクミカ、どうしてわたしたち、ペットボトルのふたなんかあつめなきゃいけないんだろう?」

クミカは笑顔で答えた。

「このペットボトルのふたから、すごいワクチンができるからだよ」

「すごいワクチン?」

「そう、すごいワクチン。アフリカの子供たちの病気を治すための、すごいワクチン」

「すごいワクチン」

わたしはいたく感心して、ざるの中の洗浄されたペットボトルのふたをながめた。湿った大量のふたは、午後の太陽光をつけてきらきらと輝いていた。

わたしたちはいま、だれかの命を救うとても大きな仕事をしているのだな、ときゅうに誇らしくなってきた。わたしは真剣にペットボトルのふたを洗った。

クミカからサボテンをもらったのは、わたしたちがペットボトルのふたをあつめて半年ほどが経ったころだった。

クミカはサボテンの鉢を持って、教室に入ってきた。鉢をわたしの机においてクミカは言った。

「これ、麻衣ちゃんにあげる」

「どうしたの? このサボテン」

「この前、区役所にペットボトルのふたを持っていったらね、『いつもありがとう』って、職員さんがこのサボテンをくれたの」
クミカはにっこりと笑って言う。

「でもね、私の家、もうサボテンがいっぱいあるから、これは麻衣ちゃんにあげる」

わたしはサボテンを受け取った。サボテンなんか今までぜんぜん興味なかったけど、よく見ると、サボテンって結構いいもんだなって思った。

「すぐくかわいい。ありがとうクミカ、大切に育てるね」

「もつとほしい？」

「いいよ。これだけでじゅうぶん」

それからクミカはサボテンの育て方をくわしく教えてくれた。わたしはサボテンの育て方をメモに取ってお礼を言った。

涼二はたびたび、わたしの部屋にやってきて、窓際のサボテンを恋しそうに見つめている。やっぱり、もう一個だけクミカにねだってみようかな、とわたしは検討してみるのだった。

しかし、わたしはひとつだけ心配なことがある。ここ最近のクミカは、心なしか元気がないように見えるんだ。

scene 4：サボテンの花

中二の夏が始まって以来、クミカは一度もプール授業に参加していない。いつも制服姿で、プールのすみっこで体育座りしている。わたしは気になって、授業が終わってすぐにクミカに近づいた。

「水泳きらい？」

クミカは首を横に振った。きらいではないらしい。

「じゃあ、生理？」

クミカはまた首を横に振った。生理でもない、そして泳ぐのもきらいじゃないということは、わたしにはもうクミカがプール授業に参加しない理由が思いつかなかった。

「麻衣ちゃん、サボテンは元気？」

クミカはぎこちなく笑って話をそらした。

わたしはかなりしつこかったと思う。何度も何度も、クミカに水泳をしない理由を問いただした。プールの授業が終わるたびにクミカのそばに来て、「体調わるい？」とか、「泳ぐとぜったい気持ちいいのに、どうして泳がないの？」とか、しつこく訊いた。

すると、クミカはとうとう観念して、「こっちにきて」とわたしの手を引いた。

わたしたちは脱衣所の影にまわった。そこはフェンスと脱衣所の石壁とにはさまれ、ギョウギシバがこんもりとしげっているようなとてもさびしい場所だった。わたしははだしのままだったので、地面がちくちくして足がいたかった。

クミカはいきなり、セーラー服の上を脱いだ。クミカの肌はしろくて、ブラもまっしろだったから、真上から射してくる光に反射してすぐくまぶしかった。でもそれだけで、とくにこれといってクミカに変わった様子はなかった。

「だれにも、いっちゃだめだよ」

クミカは、くるん、と回ってわたしに背中をみせた。わたしは息をのんだ。

彼女の肩こう骨のあたりには、五角形のおおきな火傷跡があった。ブラのひもで火傷は二つの島にわかれていたが、ほんとうは一つのおおきな五角形なんだなってわかった。わたしはその跡から、熱い蒸気を発するアイロンを連想した。

「パパがね、うちに帰ってきたの」

なんのことだろうと思った。でも、クミカは声をつまらせてくるしそだったたので、それがとんでもなく良くないことだったのは、よくわかった。

「パパね、むしゃくしゃすると、やつあたりしなきゃダメみたいな。そういう病気なの」

それだけ告げると、クミカはしずかに泣き出した。うしろ髪のおいだからのぞく耳は真っ赤になっていた。はずかしくて、みじめで、クミカの心は洪水をおこしてしまっただんだ。

わたしは火傷跡をじっと見つめた。きれいな赤というよりは、みにくい赤黒で、全体的に汚らしくかぶれていた。クミカが必死に抵抗したことが、ありありと目に浮かぶようだった。

とつぜん、眉間のあたりがじゅつと熱くなった。もし、わたしもアイロンを当てられたなら、こんな感じかもしれないと思った。こんどは、胸のあたりにも焼けるような痛みがはしった。あまりにおさえきれないので、爪をたてておもいつきり？きむしってやりたいくらいだった。

わたしはふだん、あんまり怒ったり悲しんだりしないひとだけれど、今ばかりは勝手がちがった。

いまのわたしは、とても怒っていて、悲しくて、そしてくやしかった。

この怒りと悲しみをどこにぶつければいいのか、どう処理すればいいのか、わたしはわからなかった。クミカを助けてあげたいと思っただけ、具体的にどうすればいいのか、ぜんぜん、ちっともわか

らなかったのだ。

夏休みが近づいたある日、クミカといっしょに学校から帰るとき、わたしはある提案をした。

「今日の夜中、学校のプールに忍びこもうよ」

クミカはおどろいて口をつぐんだ。やがて、それがどういう誘いなのか察してしまったように、彼女は顔をうつむかせた。

「だめだよ、そんなことしちゃ」

「だめじゃないよ。だってクミカ、泳ぎたいんでしょ？」

わたしはクミカの制服をつかんで、顔をのぞきこもうとした。だけれどそれは拒まれて、クミカはいっそう顔をうつむかせた。

「わたしだけなら、見られても大丈夫だってば」

「ねえ、麻衣ちゃん」

クミカは、すう、と息を吸いこむ。口元には笑みが浮かんでいた。「心理占いであげる」

わたしはあつけにとられてクミカを見返した。

「ある日、おもちゃ屋さんにてかけたあなたは、ふと目についたお面を手にとりました。さて、それはどんなお面でしょう。A、正義の味方。B、鬼。C、能面。D、ピエロ」

聞きおぼえのある占いだった。わたしはすぐに思いだした。

小学生のとき、クミカと初めて話したあの日、クミカはそのときもこの占いをだした。わたしはそのときのことを思い返しながらか、慎重にこたえた。

「Cの能面」

「ことこたえたあなたは、いつも笑顔がすてきなひと。誰にでもやさしくて、困っている人を見ると、助けたくてしょうがなくなるひとです。でもね、この占いには、もうひとつの意味があるの」

クミカはひと呼吸おいて言った。

「ほんとうはね、この占いは、自分が他人からどう思われたいか、

をはかるためのものなんだよ。私、あるとき嘘ついちゃった。麻衣ちゃんは、『笑顔がすてきで誰にでもやさしいひと』『じゃなくて、『笑顔がすてきで誰にでもやさしいひとに見られたい』だけのひとなんだよ。麻衣ちゃんは、やさしいひとの仮面をつけてるだけなんだよ」

クミカは唇をかんで、走りだした。わたしはしばらくぼうつとして、それからクミカを追いかけた。

わたしは信じられなかった。今まで一度もいじわるを言ったことがなかったクミカが、あんなことを言うなんて、信じられるわけがなかったのだ。

クミカはわざと、あんな風にわたしを遠ざけようとしているんだ。わたしはそんなの、ぜったい嫌だった。

「今日の夜十時、学校のプールに集合だから！」

わたしはそれだけ叫んで伝えて、クミカを追いかけるのをあきらめた。

夜の十時になって、わたしはギンガム柄の布バッグを持って学校に忍びこんだ。布バッグには、水着と、バスタオル二枚と、おやつのおにぎりを二人ぶん握って入れてきた。

フェンスを乗り越えて、わたしはプールサイドに降りたつた。

クミカはまだ来ていなかった。

わたしは眼鏡をはずして、布バッグから水着をだして着替えた。

バスタオルを体に巻いて、プールのはじっこに座りこんだ。

見上げると、濃灰色の夜空があった。涼二と行った海では、もっとたくさんの星が見られたけど、そこで見上げる空には、ほとんど星は見られなかった。ぼんやりとした光の残影が、うっすらと網膜にのこるだけだった。

わたしはバスタオルのしたで肩を抱いた。お腹がすいてきたけど、クミカがくるまで、ぜったいにおにぎりには手をつけないぞ、と心に決めた。

その日、クミカがプールにあらわれることはなかった。

しばらくして、担任の先生が「市松クミカさんは、とおくの学校に転校しました」と、それだけ言った。

生徒のあいだではある噂が流れていた。

クミカの両親は離婚していたはずなのに、父がとつぜんクミカの家に戻ってきたそうだと。帰ってきたクミカの父は、多額の借金をかかえていた。その噂では、クミカはほんとうは転校じゃなくて、家族につれられて夜逃げしただけなんだって、面白はんぶんにはささやかれていた。

家に帰ると、サボテンに花が咲いていた。

乳白色のかわいくて小さい花で、それはクミカの笑顔によく似ていた。

あんまりかわいいのでおもわず手を伸ばしたら、サボテンのトゲで指を怪我してしまった。そんなところまで、クミカにそっくりなんだなあ。

指にはんそうこうを貼って、ベッドに腰かけながら、わたしは乳白色のサボテンの花をながめた。いつまでながめていても、サボテンの花はきれいで飽きなかった。

scene 5: 痛んだ手のひら

昔はそれほどでもなかったのに、どうも最近、お父さんの存在が鼻についてしょうがない。

顔はあぶらぎってるし、息はくさいし、人前でフツーにおならするし、はげてはいないけどいつも髪テカテカしてるし。つまり、見た目がとにかくきたないのだ。いや、見た目だけならまだいい。お父さんはとにかく、粗野で鈍感で不器用だ。

たとえば食事のとき。お父さんはものを食べるとき必ず、ぺちや、くちや、と音を立てる。あまり噛むひつよのない食べ物まで、ごうかに音を立てるのだ。昔はたいして気にならなかったのに、いまは耳がむずむずして、鳥肌も立って、たまらなくなるほどガマンできなくなっていた。

「お父さん、口開けてもの噛むくせ、なおしなよ」

お父さんは目をぱちくりさせて、へへへ、と笑った。

「こりや、失礼いたしやした」

お父さんはイラツとくるくらいおどけて、ぎとぎとのひたいをぺしつとやった。

洗濯機から洗濯ものを取り込むゆりちゃんのもとに詰めよって、わたしは「あーっ」と声をあげた。

「ゆりちゃん、お父さんの服とわたしの服、いっしょに洗ってたでしょー!」

ゆりちゃんのはっとして、「もうしわけない、うっかり」と言った。ゆりちゃんの手から洗ったばかりのわたしの服を取り上げて、再び洗濯機にほうりこんだ。洗濯用洗剤をたっぷり入れて、スタートボタンを押した。

「ゆりちゃんは、なんでお父さんなんかと結婚しちゃったの?」

「だって、野生的だし、イケメンじゃん」

目がくさつとるんじゃなかるうか、とわたしは思った。でも、ゆりちゃんとはケンカしたくないので、口には言わなかった。

わたしはある日、涼二といっしょに美容院へ髪を切りにいった。

ほんとうは兄妹そろって散髪なんて恥ずかしかつただけで、ふたりとも髪が伸びてきたからいっしょに切ってきたさといって、ゆりちゃんが多めにおこづかいをくれたのだ。バイト代だとおもえばやすいものだった。

美容師のお姉さんが、手もとの台に週刊雑誌をおいた。その雑誌が『週刊春光』だったので、わたしはちょっといやな気分になった。しかしわたしは、「きれいな雑誌なので替えてください」なんて図々しいことを要求できるほどたいそうな根性は持ち合わせていないので、仕方なくその雑誌を手にとった。

わたしはとある記事に目を通して、かつ、と頬が熱くなるのを感じた。

「美容師さん、この雑誌、わたしに売ってください」

美容師のお姉さんは小首をかしげて、「いいですけど？」と言った。

美容院を出て、わたしは涼二に『週刊春光』をつきだした。

「36ページの、『44歳のぼやき』を読んで」

「おやじのコラムじゃないか。どうしたんだ急に」

「いいから読んで」

涼二はしぶしぶ雑誌をひらいた。そして彼は、くすり、と笑いだすのだ。

「これ、麻衣のことが書いてあるじゃないか」

わたしはぶせんと腕ぐみして、そっぽを向いた。

わたしのお父さんは、フリーライターの仕事をしていて、この『週刊春光』でもコラムだかエッセイだかを連載している。

今週のお父さんの記事では、読者からの質問コーナーがひらかれ

ていた。

『Q：最近、十三歳の娘がひとことも口をきいてくれません。べつに娘本人には悪いことをした記憶はないのですが、これってやっぱり、私の不倫がバレてしまったからでしょうか？ 心配で夜もねむれません』

こういう読者の質問に、お父さんはこうこたえていた。

『A：不倫はイカンですよ不倫は（笑） まあ、その不倫とやらがバレていないことを前提にしても、そういった年頃の女の子はむずかしいですからね。いえ、むしろ健全です。それに、こういう思春期の通過点をじっと耐えるのも父親のつとめですから。僕も中学三年生になる娘がいるんですがね、このあいだなんか、ふつうに飯を食ってるだけのつもりだったのに』

これ以上は、腹がたつので思いだしたくもない。

わたしは、「家族のこと、とくにわたしのことは記事のネタにしないで」と、ふだんからきつく言いつけているはずなのに、わたしがちよつと目を離れた際に、お父さんはこうなのだ。

健全？ 思春期の通過点？ まったくお笑いぐさである。道ばたに、ぺつ、とツバでも吐いてやりたい気分だった。

「お父さんは自覚がないんだよ。自分がきもいからいけなんだって、ぜんぜんわかかってないの。ねえ涼二、わたしが言っても効かないみたいだから、こんどは涼二が文句言ってみてよ。なんなら、グーでなぐってもいいから」

涼二にしがみついて懇願したけど、涼二はげらげら笑うだけで、まったく取り合ってくれなかった。

庭先にて、サボテンの周りで伸びきってしまった多肉植物の摘みとりをしていると、お父さんがやってきた。にこにこ変な愛想笑

いを浮かべていた。

「あの記事のこと、まだ怒ってる?」

わたしは無視を決めこんだ。

「お父さんが悪かったよ。もう麻衣のことは書かないから」

わたしは無視を決めこんで、せつせと多肉植物の摘みとりに没頭した。

「それ、いいサボテンだね。お父さんにもよく見せてよ」

いきなり、お父さんの手がサボテンの鉢へと伸びた。わたしはびっくりして、とっさにお父さんの手をひっぱりたい。おもわず手が出てしまったことで、わたしは自分自身にさらにおどろいて、ちよつと涙目になりながらお父さんをにらんだ。

「クミカのサボテンに、さわらないで……」

いつもひょうきんにわたしをあしらうお父さんも、これにはさすがに閉口してしまった。たたかれた手の甲をおさえて、肩を落としながら家に戻っていった。

お父さんをたたいてしまったわたしの手のひらは、じんと痛んだ。

scene 6 : あまい卵焼き

あれから、『週刊春光』の発売日になると、わたしは深夜こっそり家を抜け出してコンビニに行き、お父さんのエッセイをチェックするようになった。

またわたしのことが書かれていないか監視するためでもあるし、それに、このエッセイにはお父さんのふだん見せない一面が隠されているような気がして、ちょっとだけ興味がわいたからでもあった。いつかお父さんが言っていた。『週刊春光』での連載は、わりと好きなことを書かせてもらえるから楽しいって。だからかもしれない。

お父さんの手をたたいたあの日から、お父さんは不自然なくらい相変わらずだった。

一度ウケたギャグをしつこく何度も連発してくるし、ご飯のくちやくちやはおらないし、おならは脳細胞が死んじゃいそうなほどくさい。

だからこそわたしは、お父さんの本性をあばきたくなったんだ。

コンビニから帰ってくると、もう深夜の二時になっていた。でもぜんぜん眠くなくて、わたしはベッドのうえで何度も寝がえりをうった。

そうしているとだんだん浅い眠気がやってきて、ずるずると足をひっぱられるみたいに、わたしは夢の中におちていった。

わたしは、家の玄関の前でうずくまっていた。やけに庭が広いなあと思ったけど、わたしが小さくなっていただけだった。わたしは、小学二年生のあのころにもどっていた。

そうだ。わたしはいま、家から締め出されているんだっけ。

その日、わたしはソロバン塾の帰りに万引きをした。おなじ塾の五年生の男の子にそそのかされたのだ。

駄菓子屋のおばあちゃんは、たびたび居眠りをしているから無防備だった。アメの数個くらいパクつても大丈夫さ、と男の子が言った。

ほんとうはわたし、そんなことぜったいしたくなかったけど、その男の子は学区内でも有名なケンカ自慢だった。べつに弱いものイジメはしなかったけれど、歯向かう者はすぐにゲンコツでだまらせた。それだけだから、それほどわるい子じゃなかったと思う。男の子も、ちよつと魔がさしたただけだったんだ。

それでもわたしはその男の子をおそれていて、うながされるままにモンブランチョコレートを一個だけ盗んでしまった。

いざ家に帰ってみると、わたしはきゆうに後ろめたくなっていた。子供は牢屋には入れられないってことはなんとなく知ってたけど、自分がものすごくイヤになってきて、おもわずゆりちゃんに万引きのことを告白した。

ゆりちゃんといっしょに、駄菓子屋のおばあちゃんのところへあやまりに行った。その帰り、ゆりちゃんはとっぜん泣きだして、わたしのほっぺたをひっぱたいた。たたかれたほっぺたはいつまでもしびれて、体ぜんたいに浸透していった。ぼうぜんとして、涙もでなかった。

それでわたしは家を追い出されて、しばらくそこで反省するようにな、とゆりちゃんから言いつけられた。

庭にはおおきな木が生えていた。たまにやってくる風に揺れて、木はゆらゆらとダンスしていた。わたしにはそれが巨大な怪物みたいに見えた。いまにも一步ふみだしてきて、わたしにおそいかかってくるように見えたのだ。わたしはふるえながら泣いた。

万引きしても、たたかれても泣かなかったのに、わたしはそこで

はじめて泣いた。ひとりぼっちの恐怖や、だれにも守ってもらえないという不安は、どんなものよりもおそろしかったのだ。

顔をふせて、わたしはそれらすべてのおそろしさから耐えた。すると、わたしの体がとつぜん、ひよい、と宙に浮いた。

「どうしたんだ麻衣、こんなところで」

お父さんが、わたしの脇に手を入れて、猫みたいに持ち上げてわたしの顔をのぞきこんでいた。

そのときのお父さんはおおきかった。うしろで揺れる木よりもおおきく見えた。お父さんよりおおきい人はこの世にいないんじゃないかと、わたしはそのとき本気で思った。

事情を一から七くらいまで説明したところで、お父さんはいきなりわたしを地面に降ろして、いきおいよく玄関を開けた。

お父さんに手を引かれて、わたしは家に入れてもらうことができた。

お父さんにしかられるゆりちゃんは、うさぎみたいにちぢこまってちょっと可哀想だった。わたしはお父さんの背中に隠れていた。

お父さんの背中はやっぱりおおきくて、すぐくたよりになった。

お礼に、お父さんに料理をつくってあげた。と言ってもわたしはまだ小さかったし、たいしたもののはつくれなかったけれど、一番自信のある卵焼きをつくってあげた。

そうだ。わたし、卵焼きを食べるお父さんに向かって、「こう言ったんだ。

「わたし、将来お父さんと結婚する」

目が覚めたわたしは、きゆうに伸びた身長にかなり困惑して、それが夢だったと気づくのしばらく時間がかかった。

そして、「イヤなことを思い出したなあ」と枕に顔を押しつけて

じたばたした。結婚したいだなんて、あのころのわたしはなんて恥ずかしいことを言ってしまったんだろう。

ひとしきりじたばたしていると、こんどは胸がきゅっとしめつけられるような感覚におそわれた。

お父さんは、あのころとなんにも変わっていない。いつまでもずっと、わたしのことを大切にしてくれている。なのに、どうしてこんなことになってしまったんだろう。この胸のくるしさはいったいなんだろう。

わたしは顔をあげて、窓の外で揺れる木々をながめた。なんであるのが怪物に見えてしまったんだろう。いくら見つめてみても、それはわからなかった。長い間ながめて、わたしはふうと息を吐いた。

変わってしまったのは、わたしだけだったんだなあ。

早朝、お弁当をつくるゆりちゃんの横に立って、わたしは卵焼きをつくった。ゆりちゃんはなにも言わず、お父さんの弁当箱のはしにそっと、小さなスペースを空けてくれた。

「お父さん、気づかないかもしれないよ？」

「気づいてくれなくていいもん」

わたしは空いたスペースに卵焼きを二切れだけ入れて、逃げるように台所をあとにした。

『第67回 44歳のぼやき』

(前略)

記念日といえば、先週は父の日でしたね。全国のパパさん方はしかるべき功績をあげられましたでしょうか？

(中略)

というわけで、娘から『こんどわたしのことを記事にしたら一生口利いてやんない』と言われてしまったのですが、先日、あまりに

うれしくて思わず泣いてしまった出来事がありました。なので、思い切って書きちゃおうと思います。

あれは、まさに父の日のことでした。編集部のみつこで弁当を食おうと思ったんです。弁当箱のふたを開けた瞬間、甘い香りもわっとやってきて、それで僕は直感しました。ああ、娘の作ったものが混じっているなど。

僕の予想通り、卵焼きでした。これがまた甘くて甘くて、「ケーキか!」とつつこみたくなるくらい砂糖たっぷりなんですけど、間違いない娘が作ってくれた卵焼きだとわかりました。

泣きながら食ったら女子社員のみなさんから白い目で見られましたけど、男性陣はぽんぽんと肩たたいてくれました。パパにだけしか伝わらないものがあるんですね、これが。

(中略)

さて、この記事を読んでいるアナタ、特に美容室や床屋などこの雑誌を手にとっている方々へ、ひとつだけお願いがあります。今すぐこのページをやぶり捨てて、僕の証拠隠滅に協力してください。でない僕、こんどこそ娘から口を利いてもらえなくなるので……」

いきつけの美容室の中、わたしは『週刊春光』から目を上げて、『44歳のばやき』のページに手をかけた。いい度胸だ、やぶり捨ててやるう、と。美容師のお姉さんはハサミを止めて、不安そうにわたしを見まもっていた。

しばらく考えて、やっぱりわたしは、ページから手を離してあげることにした。

「この雑誌、わたしに売ってください」

美容師のお姉さんはほっと胸をなでおろして、「タダでいいですよ」と言った。

scene 7：ノブテルとの出会い

中三の秋、わたしはノブテルと出会った。

それはとてつもなくイヤな出会い方だった。そもそも出会いといえは聞こえが良すぎるし、美化しきったような言い方だけど、とにかくわたしは、その日ノブテルと出会ってしまったのだ。

近所の河原を歩いてみると、涼二が川面にむかって石を投げている。涼二は高校二年生にもなって、いまだにこうして幼稚なストレス発散をしている。涼二にどんなストレスがあるのかなどわたしの知ったことじゃないので、わたしは彼を無視して遊歩道を歩いた。

遊歩道の終着点には、産業廃棄物などが打ち捨てられている空き地があった。わたしは散歩のとき、いつもここを折り返し地点としている。

そこで踵をかえして家に帰ろうとしたけど、今日はなんだかガレキの奥が騒がしかった。

なんだろうと思って覗いてみると、廃棄物の山の裏側で、うちの中学の男子が数人たむろしていた。彼らはみんなタバコを吸っており、円を囲むようにたたずんでいる。ぜんいん、うちの学校では『不良』と分類されるような男子ばかりだった。

「なにをしているの？」

話しかけると、田畑という男子が振り返った。田畑もタバコをくわえていた。

「タバコなんか吸っちゃだめなんだよ。先生に言いつけるよ」

田畑は「まあまあ」と言った。

「それよりもさ、こいつ、ほんとおもしろいんだぜ。西江も見ていけよ」

田畑はその場をどいてみせた。男子の円の中心には、ひとりの男の子が地面によこたわっていた。

男の子は顔面じゅうに青あざをつくっていて、泣きながらマスタ―ベーションをしていた。わたしは口もとをおさえて半歩あらずさった。

「このひとは？」

「七組のノブテル。うちの学校だけ。知らねえの？」と田畑は言った。

わたしはノブテルという男の子の顔をちらりと見てみたけど、ぜんぜん覚えがなかった。

「まあ、知らなくても無理はないな。こいつ、影うつすいから」

「どうしてノブテルは、みんなの前でこんなことをしているの？」

「おまえ、ほんと天然だなあ」

田畑は片眉をあげて苦笑した。まわりの男子たちも同じように笑った。

「オレらがやれって言ったから、やってんだよ。自らすすんで人前でオナニーするようなやつは、ほんものの変態だぜ」

「もうじゅうぶん変態だろ」田畑のとなりの男子が笑った。

「そういうことだ。西江も、こいつがシャセイするまで見物していけよ」

「わたし、帰る」

わたしがそう言うと、田畑はノブテルにむけてさげんだ。

「おまえのチンコがいつまでもしぼんだまんまだから、西江もつまらないつつつて帰っちまうじゃねーか」

わたしはそんなこと、ひとことも言っていない。直後、ノブテルのそばにいた男子が彼の背中を蹴った。ノブテルは顔を真っ赤にさせて、必死にオチンチンをこすった。

ノブテルにアダルト雑誌を広げて見せていた男子が、「俺が手伝ってやる」と言って、ノブテルの手をどけた。アダルト雑誌をまるめて、そこにノブテルのオチンチンを差し込んだ。それから激しく

上下させていた。

ノブテルがシャセイしたのは十五分くらいが経ってからだった。まるめたアダルト雑誌の先から垂れる白い液体に、みんな、手をたたいてよろんでいた。

「ああ、たのしかった。もう帰ろーぜ」

田畑が言うと、男子たちはだらだら歩きながら空き地を出ていった。

ノブテルは地面に顔をうずめて、しばらくすすり泣いていた。オチンチンはすり切れて、うすく血がにじんでいた。

ノブテルはパンツとズボンをはいて、ぬるっと起きあがった。わたしはノブテルの五メートルくらいうしろを着いて歩いた。

わたしの頭は真つ白だった。オチンチンなら、昔、お風呂場でお父さんや涼二のを見たことがあったけど、ボツキしたオチンチンや、その先から出る液体を見るのは、生まれてはじめてだった。ノブテルの背中を見ていると吐き気がこみあげてくるので、わたしは足もとを見ながら歩いた。

夕暮れの河原で、涼二はまだ石投げをやっていた。わたしは走ってノブテルを追いこして、涼二のとなりで、涼二と同じように石を投げた。

ぼちゃん、と小さな水しぶきがあがった。

「ノブテルも、同じようにやってみなよ」

わたしは振り返って言った。ノブテルはもじもじしながらうなずいた。ノブテルも涼二のとなりにならんで、地面にうまっていたおおきな石を引っこ抜いた。

頭のうえに持ち上げると、ノブテルの細い体がぐらりと揺れた。

「おいおい、大丈夫かよこいつ」

涼二はひたいの汗をぬぐって失笑をこぼした。わたしはだんだんイライラしてきて、ふらふらしつづけるノブテルをけしかけた。

「ノブテル、はやく投げて」

ノブテルは、力んで赤くなつた顔に青すじまで立てて、イヌみた
いな雄叫びをあげた。

どちやーん、と、川面におおきな水柱がたつた。

scene 8 : ややししいあれこれ

わたしのクラスでははやくも、昨日のノブテルのことが話題になっていた。田畑の携帯には、ノブテルの恥ずかしい写真がおさめられていた。

クラスメイトひとりひとりに写真を見せていく田畑に、利恵が嫌悪感をあらわに声をあげた。

「いい加減くだらないことやめなよ田畑。あたしたち、もう受験生なんだよ！」

もつと言ってやれ、とわたしは心の中で利恵を応援した。でも、田畑に携帯のディスプレイを見せつけられた利恵は、ちよつと楽しそうに「やめてってばきたない」と半ぶん笑っていた。こりゃだめだ、とわたしは思った。

次の休み時間に、わたしは田畑の席に近づいた。

「これからも、ノブテルにあんなことを続けるの？」

田畑は足ぐみして携帯をいじりながら、てきとくに答えた。

「気が向いたら、またなんかやろうと思う。西江も暇だったら見に来ていいぜ」

田畑の口臭は今日もタバコくさかった。わたしはおもわず顔をしかめた。

「どうしてあんなにひどいことができるの？」

「どうしてって。そりゃあ、あいつが弱いからに決まってるだろ」

「ノブテルが弱いから、田畑たちはひどいことができるの？ ほんとうはノブテルが弱いからじゃなくて、もともと田畑たちがひどい性格だったからじゃないの？」

田畑は、ふん、と鼻で息を吐いた。携帯をとじて、かしこまったようにわたしに向きなおった。

「西江、おまえはまだ脳みそがおこちゃまみたいだから、オレが懇

切丁寧に世間というものをおしえてやるよ」

わたしは田畑のとなりの席にすわって、田畑とおなじようにかしこまった。

「オレたちはたしかにひどいことをしているかもしれない。昨日みたいに公開オナニーをさせたり、イヌやネコのえさ食わせたり、カツアゲしたり、気晴らしにぶつとばしたりもしている。ここ一年くらい、ほぼ毎日」

「一年も。わたし、ぜんぜん知らなかった」

「なんでオレらがこんなことを続けるんだと思う？ オレらの性格がひどいからとか、ノブテルが弱いからとか、いまは置いといて、ほかにどんな理由が考えられる？」

わたしは必死に考えた。

「わからない」とわたしは答えた。ほんとうにわからなかった。

「楽しいからにきまつてるじゃん。それ以外に理由はない。楽しいからイジメる。単純だろ」

「あたまおかしいよ」

田畑は表情ひとつ変えない。むしろ余裕げだった。

「でも、逆に考えてみるよ。頭おかしいオレらのおかげで、あの弱つちいノブテルは精神的に成長するんだぜ。そうなると、やっぱりイジメって必要だろ」

「イジメられると、ノブテルは成長するの？」

「そうさ。人間の社会ってのは、どうしても上下関係がつきものだからな。弱いやつを下につけなきゃ、弱いやつはいつまでも自分が弱いんだって自覚できない。自覚は成長の第一歩だ。逆に、もしノブテルが弱くなかったら、オレたちだって最初からイジメなんてしなかったさ」

正直、わたしには田畑の話がよくわからなかった。このことはあとでゆっくりかんがえようと思った。だけど、ひとつだけわかったことがある。

「ノブテルが強くなったら、田畑たちはもうイジメをやめてくれる

の？」

「そうだな、万が一そういうことになれば、やめるだろう」

無理だろうけど、と田畑は笑った。携帯をひらいて、しっし、とわたしを追い払った。

放課後になつて、わたしはノブテルのいる七組に立ち寄った。そこで知り合いの椎野とはち合わせして、「うちのクラスになにか用？」と尋ねられた。わたしは、「ノブテルに用がある」と答えた。椎野はきよんととして、「ノブテルって、あのノブテル？」と小首をかしげた。うなずくと、椎野は苦笑いで「ほどほどにね」とだけ言つて、わたしから離れていった。

ノブテルはわたしに気づくと、カバンを持って逃げようとした。わたしはノブテルのカバンのひもをつかんだ。

「はなしてよ。ぼくに聞かると、西江さんまでイジメられるよ」

「わたしはイジメられないよ。でもノブテルは、これからもイジメられつづける」わたしはきつぱりと言った。「どうしてだと思つ？」

ノブテルは顔をそらした。

「あなたが弱いからだよ」

ノブテルは聞こえないふりで黙りつづけた。わたしはその煮えきらない態度にムカツときて、もうすこしなにか言つてやろうと思つたが、やがてノブテルはすすんと鼻をすすりだした。ノブテルはさっそく泣いてしまったのだ。こりゃあ、いじめたくもなるな、とわたしは思つてしまふのだった。

帰宅していちばんに、わたしは涼二の部屋に行った。涼二に今日のことを話すと、涼二はかるく頭をかかえて、ため息まじりに首を振った。

「麻衣は、ほんとうこういうの苦手なんだな。どんなやつだろうと、男にはプライドってもんがあるんだぜ。相手が異性だと話はまたち

がってくる。ノブテルのプライドはもう、意識不明の重体なんだからなあ」

「なら、どうすればいいの。ノブテルを強くすればイジメが止まると思っただけだ。わたしのやりかたって、そんなに間違ってるのかなあ」

わたしたちは二人してうなつてかんがえた。涼二が宙を見あげながら言った。

「昨日、河原でノブテルを見ながら思っただが、ノブテルは、構造からしてそもそも無理なんだと思う」

「構造？」

「そう。どうやって強くなるだとか以前に、やつは構造上から無理なんだ。日本人が欧米人のように屈強な骨格を持ってないのと同じように、ノブテルも、人間的に強くなれるようにはできていないんだ。説得力があるような、無いようだった。」

「じゃあどうすればいいの？」

「おまえら、もうすぐ卒業だよな」

「それがなにか？」

「そのイジメられ具合だと、ノブテルも田畑たちと同じ高校に通おうだなんて思っっちゃいないだろ。だったらあとはこっちのもんだ。卒業までほっときゃいい」

わたしはまったく納得していなかったが、「そうかもね」と言って、涼二の部屋を出た。

自室でいくらかんがえても、のどの奥には異物が引っかかるような感じがのこっていた。

田畑や涼二の話は、表面的には的を得ているようで、実際どこかがずれている。根本の解決がなっていない。上下関係のすえに成長するとか、逃げきれば勝ちだとか、その程度のことだ。ノブテルの環境が一新するとはかんがえられなかった。

ノブテルみたいになやつはきつと、どこまで逃げてても、どれだけ自分の弱さを自覚できても、変わりはないだろう。

かといって、わたしにいい案があるわけでもなかった。それに、だんだんどうでもよくなってきた。べつにこのままでもかまわないんじゃないかと。自分にいい案が浮かばないから、田畑や涼二の意見に片足をつっこみはじめているのかもしれない。

わたしは、こういうのは苦手だったんだ。これ以上ややこしいことをあれこれ考えたくない。

翌日。情性的に、わたしは進路指導の先生にうちと七組のクラス
の進路希望一覽をもらった。ノブテルと田畑たちの志望校は、まさに第三志望まで、まったく一致していた。進路指導の先生はうんと首をひねった。

「しかし変だよな。ノブテルの偏差値なら、もう二ランクは上の高校を目指せるのに。西江、おまえノブテルと仲いいか？もしそうだったら、西江からもあいつのこと説得してやってくれ」

わたしはさりげなく否定しながら、さらに頭を混乱させた。ノブテルはいつたい、なにをかんがえているんだろう。

scene 9：石を投げるひとたち

その日は土曜日だったので、図書館で歴史と数学と英語の勉強をして、野草の本を借りた。

帰り道はちよつと遠回りをして、お気に入りの川沿いの土手を歩いた。

野草図鑑を開きながら歩いていると、河畔土手の草むらで待宵草を見つけた。日が落ちたころに花を咲かせ、午後にはしなびてしまふという一夜花である。こんなまつ昼間から見られるなんて運がいい。

わたしはしゃがんで待宵草をながめた。花弁は鮮やかな黄色。おしべは八本。花はピンと上を向いている。こうして見ていると、昼間のうちにしぼんでしまふなんてとてもじゃないが想像できない。本来の性質も、骨組みも、そして昼夜すらも関係なく、この花は日光にあらがっていつまでも咲きほこっていてくれそう。

土手の先から涼二がやってきた。涼二は背後にノブテルをしたがえていた。二人は釣り道具を抱えていた。

涼二はあれから、ノブテルを子分のようにあつかっている。今日も、折りたたみ椅子やクーラーボックスなどの重たい道具は、ぜんぶノブテルに運ばせていた。涼二の図々しさにはあきれものである。ノブテルもノブテルだ。年下だからって、むやみに先輩の言いなりになんかなくていいのに。

わたしは、足もとで花を咲かせる野草と、情けないノブテルとを見比べて、ちつとはこの待宵草をみならえ、と心の中で悪態をうつた。

涼二は裸足なり、ズボンのすそをまくって川瀬に立った。釣り針に餌をつけるのはノブテルの役目である。

餌がついたことを確認すると、涼二はリールを巻いて糸をたぐりよせた。

「お前も、ウキの反応に注意して見てろよ」

涼二の命令にノブテルは二、三度うなずいた。

わたしは折りたたみ椅子を開いて、ノブテルの隣に座った。彼はわたしの存在に気づくと、「こんにちは、西江さん」と慌ててあいさつした。わたしはむすつとして野草図鑑をひろげた。

「おお、麻衣じゃないか」

釣り竿片手に涼二が手をふった。わたしはちよつとだけ顔をあげた。

「なあ麻衣。長期戦になるかしらんし、ポカリを二、三本買ってきてくれ」

「やだ」

「なんだよ。歩いてたつた五分のところに自販機あるぞ」

「やだつてば！」

涼二はちえつと舌打ちして、ふたたびウキへと目をもどした。

「涼二は調子にのると、ああやってひとをこきつかうんだよ」

「そうみたいだね」

「イヤじゃないの？」

ノブテルは曖昧に笑うだけだった。わたしは周囲の野草と図鑑とを見比べた。むらさき色の咲かけのコスモスを見つけた。秋も深まったころに開花するのに、また珍しいものが見られたなと思った。

「花が好きなの？」

そういうノブテルの質問を無視して、わたしはたずねた。

「どうしてノブテルは、田畑たちと同じ高校を受けるの？」

ノブテルはとたんにそわそわし出した。いったんその場にしゃがみ込んだかと思うと、次の瞬間には立ち上がり前髪をいじっていた。一回せき払いをし、頬をさすって、また髪をさわった。おそろしく拳動不審だった。

「田畑たちに命令されたんでしょ。同じところを受験しろって。高

校でもおもちゃにしてやるとか、そんなこと言われたんでしょ」

「ちがうよ」

「じゃあなんで？」

そのとき、涼二が「あぁっ」と声をもらした。

「餌だけもってかれた！ ノブテル、もっかいつけて」

そして釣り針をきように彼のそばに落とす。ノブテルは釣り糸を拾おうとしたが、わたしは「まって」とそれを制止した。

「涼二なんかの言いなりになることないよ。ほんとうはあんた、今日は家でゆっくりしたかつたんでしょ？」

「こら麻衣、よけいなこと言うんじゃねーよ。今日はな、ノブテルの方からついてきたいって言ったんだぞ」

「うそばかり。ねえノブテル。わたし、あんたのこと見てるとね、すごくいらいらするんだよ。どうして自分の意志くらい主張できないの」

ノブテルは中腰のしせいのまま固まっていた。悲しそうな目をしてした。

「その証拠に、きみ、ちつとも楽しそうじゃない。いつも困ったような顔してる」

わたしはいつの間にか折り椅子から立ちあがっていた。自分でも信じられないくらい、わたしは齒がゆい思いをしているらしかった。

ノブテルは小刻みに首をふった。

「ちがうよ。ぜんぜんちがう。ぼく、困ってなんかいない」

彼は手を伸ばし、釣り針をとった。いそいそと餌をつけはじめた。「高校は自分で選んだ。田畑くんにも、どこのだれにも、命令なんかされていない。ぜんぶ自分の意志できめたんだ。これがぼくの居場所だと思うから。ぼくは、田畑くんみたいなひとから相手をしてもらえなくなると、ほんもののひとりぼっちになるんだから」

餌をつけ終わると、ノブテルは釣り針をはなした。わたしは、釣り針が水中にもぐっていく様を目で追った。

家に戻ると、窓際のサボテンの土の入れ替えをした。

ゴム手袋をしてサボテンをつまみ、もう片方の手で鉢をとんとんとたたく。すると、サボテンは土をからめてすぽっと抜けるので、土を払い、伸びきった根っこをハサミでみじかくした。からっぽの鉢の底には網を敷き、小石と新しい土を入れた。新しい土には、ほんのすこしの水でうるおいを与えた。中央に深くぼみを空け、サボテンを入れる。湿った土を寄せて根本を安定させた。最後にサボテン用の液体肥料をあたえて、完成である。

窓から入る西日を受けて、サボテンの頭がカーペットに影を伸ばしていた。

ゴム手袋ごしにサボテンにふれながら、わたしはクミカのことに
ついてかんがえた。

中一のころ、きゆうに転校してしまったクミカ。どこかとおくで、
彼女はいまでも笑っているのだろうか。むしろくしゃすると八つ当たりしてしまふ父親はどうなったのだろうか。小学生のときみたいに、
からかわれたりしていないだろうか。ひとりぼっちになんかなくて
いないだろうか。

クミカの去っていく姿が、ノブテルの悲しげな背中とかさなる。
わたしはただ、指をくわえてそれを見ていた。

思い通りにならないものは、世の中に数多くあふれている。その
節々は少しずつ器から漏れていき、サボテンの根っこみたいにいっ
か剪定されてしまふ。わたしたちにそれを止めることは出来ない。
わたしたちの目をぬすみ、望まぬ変化はつねに頭上を通りすぎてい
く。

やがて夜になり、わたしは外に出て眼鏡をはずした。

ギンガムチエツクの夜空だけは、相変わらず手の届かない高い場
所にあった。ただし、わたしの視力が年々落ちていくためか、ギン
ガムの網目はひどく曖昧に映っていた。

わたしの瞳は、あれから少しずつ濁っていくようだった。

わたしたちは中学を卒業した。

高校生になるに向けて、眼科ではじめてのコンタクトレンズを新調した。眼鏡着用の視力検査では0.7だったところ、コンタクトでは両眼で1.5の度数になるように作ってもらった。

眼科の帰り、いつもの土手を歩いた。

河原には、高校のジャージ姿の涼二と、見るもさえない私服姿のノブテルがいた。彼ら二人は交互に川へと石を投げていた。

「ひさしぶり」

ノブテルの背中をたたいて、彼の隣にならんだ。ノブテルは手を止めたが、涼二の方はわたしに見向きもせず、石を投げまくっていた。

「高校に行ったら、もうほとんど会えなくなるかもね。元気でね、ノブテル」

ノブテルは両手で、こけの生えた石をいじっていた。ひとさし指とおや指で、こけがぴりぴりとはがされる。そのありさまを彼は見下ろしていた。

「ごめんね、西江さん」

わたしはなにも言わなかった。どういう意味での「ごめんね」なのか、わからなかったからだ。わからない方がいいと思った。

わたしは、地面から突き出たひらべったい石を引き抜き、川へと放りなげた。

とっ、ぽちゃん。

ひと跳ねして、石は水中に沈んだ。

「ノブテルも、やってみなよ」

ノブテルはうなずいて、身をかるく沈めて投球フォームをつくった。涼二も投石をやめてそれを見まもった。

石が放られる。

ぼちゃん。

小さな水しぶきがあがった。ひと跳ねたりとも、石は水を切らなかつた。

「ぜんぜんだめじゃん」

涼二が笑い、わたしもつられて笑う。そのときのノブテルの表情は、笑顔と泣き顔の中間だった。

「ごめん、二人とも」

それから彼は、むちゃくちゃに石を投げた。がむしゃらに投げまくっていた。笑い声はいつのまにか途切れていた。

わたしは、無言で涼二とうなずきあった。ノブテルといっしょになつて、めっちゃくちゃに石を投げまくった。

一時間も、二時間も。日が暮れるまで三人で投げまくった。

scene 10：利恵の代わり

高校一年の秋、ゆりちゃんにつれられ、わたしは初めて渋谷という街におとずれた。

改札を出てすぐの八千公前広場には、きたない古雑誌露店と、みどり色の列車モニメントがある。そこを横切れば、駅前交差点の目がまわるような人だかりが待ちうけていた。

横断歩道のさきに大通りが何本も張り巡らされ、商業ビルには巨大な液晶広告がひしめいている。広場は路上ダンスでにぎわっており、ビルのはじっこでは、テレビの取材をうける厚化粧の女子大生がなにごとかをカメラに向かって話していた。

秋も深まったころだというのに、立っているだけで汗がにじんでくるほどの熱気だった。あまりの人の数と視覚情報に目がくるくるしてきたところで、ゆりちゃんから腕を引かれた。

「まずはスタバ。んで、109とビックカメラで買い物すませてから、最後はBunkamuraでランチでもしようね。麻衣、わかった？」

正直よくわからなかったが、とりあえずうなずいておいた。

やけにお姉さん風をふかせ、ゆりちゃんは上機嫌である。本日の彼女は、38歳にしておめめ強調のぱっちりメイク（本人に言ったらすねられそう）、あとはファンデーションを薄塗りした程度だったが、まだまだ20代後半でもぜんぜんいけそうな風采だった。もとの素材が年齢錯誤で若々しいのだから、当然かもしれない。

そんなゆりちゃんは、この街にはよくとけ込んでいた。数十数百とすれちがう女の子たちと比べても、謙遜なしでかわいい。

一方のわたしといえば、現役の高校生とはいえ、やっと制服を着なれたばかりのトーシロもいいところだったので、ロックイイベントに巻きこまれたおばあちゃんみたいな場違い感にさらされた。せめて人目につかぬよう、身をちぢこめて義母のうしろをあるくことし

かできないのであった。

わたしの高校は、県内トップの大学進学率をほこっている。授業態度もびつくりするくらい良好だ。授業のスピードもはやいのなんの、部活より塾に行く生徒のほうが多いから、ぼうつとしてっているとわたしも置いていかれそう。

その代償か、『個性を高める自由な校風』に乗っ取り、校則がありえないくらいゆるい。まだ一年生の秋なのに、すでにクラスメイトの二割は髪を染めている。なかにはピアスを空けている生徒までいるが、先生は見てみぬふりである。

そのことをお父さんに話すと、「ルールとモラルの境界って、見極めがむづかしいよなあ」と鼻をほじりながら言っていた。

高校生になると、すくなくともわたしの周りのみんなは、まるで何かから追い立てられるみたいにマせていった。

代官山でかわいい服を買った、池袋のドトールで勉強しよう、こんど原宿でナンパでもしにいくか、そんな会話が、教室内でちらほら飛び交う。一部では、渋谷までの定期券を買うのが常識となっているらしい。

わたしは、地元で遊ぶほうがずっといいと思っている。みんなが『近場』と呼ぶ渋谷でさえ、江ノ島線と田園都市線を乗り継いで一時間ちかくもかかる。あほらしくなってくるし、それにわたしは、きれいな山や川や空が、いっとう好きだ。図書館や映画館や自然公園なんかでのんびりするほうが、なにより健全で気楽だと思う。

ゆりちゃんは最近、しょっちゅうわたしをつれ回して、「なんか高校時代にもどったカンジ」などとはしゃいでいる。女子高生といっしょにいと、自分も若返った気になれるのだろう。

みんなが口をそろえて言う『渋谷』に、わたしは嫌悪感しかもっ

ていなかったが、やっぱりゆりちゃんのことを裏切れないので、しぶしぶ、今日もつきあってあげることにした。

ゆりちゃんは、さつき店員さんにネイルアートしてもらった爪先をうっとりながめていた。そんな彼女をしり目に、わたしは信号の赤色灯一点を注視した。人混みが目にふれるたびに、わたしの劣等感は一ピークに達していた。

だって、みんなきらきらしていて、あまりにもまぶしすぎる。背筋を伸ばして、ヒールをかつかさせて、個性的な衣装を着こなし、何一つ不自由なく、悩みのない人生を謳歌してますって顔をしている。みんな、体の底からわきあがる活力を武器にして生きているみたいだ。そんな人々を見ると、わたしって、なんて根暗なダウンナー女、と思ってしまうのである。

「まっつて」

わたしはゆりちゃんを呼びとめた。さあ、ランチも終わったことだし、そろそろ帰るか、という段のこと。

わたしは一瞬だけ見てしまった。小学校からの友達の利恵が、たった一人で、せまい路地へと入っていくのを。

ゆりちゃんは買い物袋をおもたそうにしながら、「なに、どうしたの」と怪訝に振りかえった。

「ゆりちゃん。わたし、まだ買いたいものがあるんだった」

「そうなの？　じゃあ、もどろつか」

わたしはかぶりをふった。

「ゆりちゃんは先に帰ってて。荷物、おもたいでしょ」

「水くさいなあ。荷物なんかロッカーにあずければいいし、麻衣のためならお義母さん、どこまででもついていくよ」

わたしはけんめいに言い訳を考えた。

「それに、友達からメールがあったの。いまだこいるのって。渋谷だよって返したら、じゃあ合流しよって」

苦しませれの逃げ口上だったけど、ゆりちゃんはあっさり信じた。残念そうというか、むしろ悔しそうな表情。

「おばさんはお呼びじゃないのね！」

泣くフリをして、ゆりちゃんはきつぷ売り場へと駆けていった。

「あんまり遅くならないようにねー」ととおくから言いつけられて、ちよつと恥ずかしかった。

利恵が消えていった路地に入ったとたん、わたしは回れ右をして帰りたくなってしまった。

夕日は陰になり、その通りは薄暗く湿っていた。ネオンの派手な看板がつづいていて、初めて見たけど、そこがラブホテル街だったことは察しがついた。

手をつなぎあうカップルとすれ違い、さらに気後れするも、わたしは勇気を出して足をふみ出した。意外なことに、わたしみたいに制服姿で一人あるきする女子高生がちらほらいた。たまに、壁に寄りそって煙草を吹かすオジサンたちからねちっこい視線をあびせられるのは、ちよつとイヤだったけど。

利恵のうしろ姿を見つけた。利恵とは高校がべつになってしまったからしばらく会っていなかったけど、髪の毛が明るい茶色になっていた。それでも、わたしが彼女を見間違っわけがない。

だからこそわたしは、信じられない思いでいっぱいだった。利恵は、スーツを着た男のひとに手を引かれていた。

彼氏かな、と思いこもうとしたが、どうもおかしい。ちらりと見えた利恵の横顔は青ざめており、つないでいない方の手は、軽くふるえていた。

よくわからないまま反射的にかげだして、利恵たちの手を引きはなした。利恵も、男のひともおどろいてわたしを見た。男のひとは、その辺にいるオジサンっぽくはなかったけど、茶髪にスーツを着崩していて、いかにも遊び人という感じだった。利恵は男のひと

を隠すようにした。

「麻衣じゃん、ひさしぶり。っていつか、なに？ どうしたの？」
目に見えてあわてている。

「このひと、だあれ？」

「……彼氏」

「彼氏？ 彼氏と、いまからどこへいくの？」

利恵は男のひとの腕をとって、逃げようとした。わたしは小走りで彼女らの横にならんだ。

「待ってたら。どうして逃げるの」

「だって、あんた邪魔だし。ていうか、空気よめつつの」

追いこして、ふたりの前に立ちはだかる。

「ねえ、あなた、ほんとうに利恵の彼氏ですか」

気まずい沈黙がながれた。男のひとが、やれやれ、と肩をすくめる。

「なんか冷めちゃったな。こうしてお友達が心配してくれてるんじゃない。オレ、他のコ探すことにするよ」

「ちがうよ。あたし、こんなコ知らない」利恵が声をおつきくして、つぎにあたしをにらんだ。「へんなやつ。さっさとどっか行けよ。」

あんまりしつこいと、警察呼ぶよ」

「いいよ。警察呼べば」

きっぱり言うと、利恵はうつと声をつまらせた。知ってる。こういうの、警察呼ばれて困るのは利恵のほうなんだ。

利恵は顔を真っ赤にして、わたしの胸もとをつかんだ。

「どっか行けつてば。あたしにはお金がいるの、あんたも分かるでしょ」

そのまま突き飛ばされかけたけど、かかとをふんばって耐えた。

そうだ、利恵の家は、最近、働き盛りのお父さんが亡くなって大変なんだ。

「なら、ふつうにバイトすればいいじゃん。どうしてこんなことするの」

「だって、バイトなんかチマチマやっただって、かつたるいし。あたしは今すぐお金がほしいの」

胸ぐらをつかんでくる利恵の腕には、わたしでも知っている有名なブランドの時計が巻かれていた。利恵は昔っから気取り屋で、自分に自信がない。小学生のころからそうだ。陰では、いつか道彦くんをモノにしてやるって言い張っていたくせに、結局、とうの本人には一言も話しかけられずに終わってしまった。

「麻衣んところはいいよね。親が共働きだから。たいした苦勞もしないで、いっぱいお小遣いもらってるんでしょ」

これには、さすがのわたしもカチンときた。力まかせに利恵の手をふりほどいて、男のひとに一歩ちかづいた。

「利恵の代わりに、わたしを買ってください」

ふたりとも、びっくりして言葉をうしなった。わたしはじろっと利恵を見た。

「分け前は、はんぶんでもいいでしょ」

利恵はなにも言い返せなかった。男のひとが、だまってわたしの手をにぎった。

scene 11：甘えんぼ

利恵とはネットで知り合ったんだって、男のひとが言った。ネットでどうやったら知り合えるのか、コンピューターにうといわたしには想像がつかなかった。

男のひとは『キリヤ』と名乗った。それが偽名だということは、わたしにもわかった。

「利恵ちゃんとは四万の約束だったけど、麻衣ちゃんもそれでいい？」

わたしはうつむきがちに、「それでいいです」と言った。

キリヤとレンタルルームにはいった。ホテルと似ているが、ちょっとちがう。シャワーやトイレはあるけど部屋がすごくせまくて、おもての看板から察するに、宿泊所というよりは、休憩所に近いような。

キリヤはベッドに座ると、上着とネクタイをとった。シャツを第三ボタンまであげると、シルバーアクセがちらつく浅黒い胸板がのぞいた。

「どうした、こっちに来なよ」

キリヤがベッドのとなりを、とんとんと指した。わたしは身じろぎひとつできず、立ちっぱだった。

「緊張してるんだね。こういうの、初めて？」

外ではぶつきらばうな口調だったが、いまでは子馬が草原で小おどりするような軽やかさがあった。地面の草木は腐っているけど。

キリヤは跳ねるように立ちあがって、わたしの耳もとに顔をよせた。すんすん、と鼻のひくつく音がして、わたしはびくつとふるえあがった。

「耳、弱いのか？」

なにも答えられずに、ただふるえることしかできなかった。しか

し、どうもキリヤは、それが感じているものと勘違いしたらしく、さつきより鼻息をあらくして耳あたりを執拗に触ってきた。

「ちよっと、まっってください」

キリヤの手を払いのける。しかし、いかつい手の甲はほとんど微動だにしない。おもわぬところで力の差を思い知らされた。

わたしの手はあっさりとつかまった。

「恥ずかしくなくていいから。ほら、二人だけだし」

そして、キリヤの手がわたしの胸へと伸びてくる。わたしは息をとめた。

キリヤの指は堅くて、単純に痛かった。軽くなでられただけで自然と頬がゆがむ。筋肉痛にへたくそなマッサージを当てられたような、もしくは治りかけのカサブタをいじられたような、じんわりとひびいてくる痛みだった。

キリヤの手つきはいかにも、こういうことに慣れてます、って感じだったけど、いかんせんわたしの胸が成長途上のためか、ただただ不快でしかなかった。

「ほら、力抜けてきたっしょ」

どこがだ、ばかやろう、と怒りたかった。でも、足とか、膝とか、自分でもびっくりするくらいふるふるして、それどころじゃなかった。

キリヤの手がおしりに触れると、こめかみの裏側あたりが、しだいにどろどろと溶けていった。

頭の中で、いろんな顔が浮かぶ。

ゆりちゃんや、お父さんや、涼二の顔。あのころの、中学生のクミカも。小学生の道彦くんも。

助けてほしい、と思った。守ってもらいたい。わたしは、いますぐにでも逃げだしたいんだなって。意識と体は、かんぜんにお別れしていた。

助けてほしい、助けて、助けて助けて助けて……。

膝がぐんとなって、体がふらついた。

キリヤが、「おっと」と言っただけでわたしを抱きとめた。そのとき鼻についた、キリヤの匂い。

なんていうか、すごくリアルだった。動物園から脱走したサルが温泉宿で一泊してきたみたいで、そんな匂い。甘いかおりの裏に、獣じみたすえた気配がかくれている。

このひと、ながいことお風呂に入っていない。香水でごまかしているだけ。そっか、と思った。このひと、利恵と同じなんだ。

「まず、シャワーをあびませんか」

キリヤの顔からいやらしさが消えた。ひょうきんな笑顔だけど、陰に面倒くさそうな苛立ちがひそんでいた。

「お、だよな。オレとしたことがうっかり。麻衣ちゃんがあんまりカワイイから、夢中になっちゃったよ」

「いっしょに入る？」と聞かれたので、わたしは愛想笑いで首をふった。

「わたし、シャワーは別々がいいです」

「そっこのが雰囲気出るもんねえ。わかってるねえ」
わかりたくない、そんなこと。

キリヤはその場で服を脱いでシャワー室にはいった。わたしはうつむいて自分のつま先を見つめた。

シャワーの水音が聞こえてくるのを見はからい、わたしはこそつと、脱ぎ捨てられたズボンから財布を抜きとった。あつかう指先は汗でべたついた。

一万円札を四枚抜きとって、部屋を飛びだした。

レンタルルームから出て、ふと首すじに触れると、ねっとりとしたイヤな感覚があった。指に付着したものを嗅ぐと、生卵とたばこ

を混ぜ合わせたような匂いがした。

キリヤの唾液だった。いつのまにか、そうされていたらしい。あわててハンカチをだして、首がすり切れるほど拭いて、ハンカチはその辺に捨てた。

体じゅうにキリヤの感触がのこっていて、きもちわるかった。

通りを曲がると、待ち伏せしていた利恵に呼びとめられた。利恵は、わたしが素手でつかんだ紙幣に気づくと、「うまいこと逃げたじゃん」と悪気もなく言った。

「あたしの分け前、四分の一でいいよ」

「それが……」

それがねぎらいのつもりなの、と言うつもりだった。うまく声が出なかった。せき払いすると、目頭があつくなくなった。

「いらないよ、こんなの」

お金を利恵の胸に押しつけると、利恵は「ぜんぶはいいってば」と両手をふった。それでもぎゅっと押しつけたまましていると、あきれたようなため息が聞こえた。

「わかってないよね、麻衣って。こんなきたないお金いらなくて、そう言いたいんでしょ。漫画の見すぎ。あほらし。麻衣って、なんにもわかってない。その泣きそうなツラはなに？ パパ、ママ、お兄ちゃん、助けてー、ってか。途中で逃げたクセに、被害者面してんじゃねーよ」

利恵は二万円だけ受け取って、残りの二万はわたしの胸ポケットに入れた。

「ばいばい、甘えんぼさん」

去っていく利恵の背中をにらみながら、わたしは一回だけ、つよく地団太をふんだ。

scene 12：見栄っ張りな街

終電間際の江ノ島線に乗り、最寄り駅から家まであるいた。

右手にスクールバッグをさげ、左手に一万円札二枚をにぎる。目をこすると、片方のコンタクトレンズが取れてしまった。どうせ1デイだし、もういいやと思って、もう片目のレンズもはずして捨てた。

目薬をさして、眼鏡をかけると、すこしだけ懐かしい視覚が気分をおちつかせた。

家はもうまっ暗だったけど、鍵はあけてあった。ちゃんと施錠してからリビングにはいる。

テーブルの上には、ラッピングされたオムライスが置かれてあった。あたためるためにお皿を電子レンジへと持っていく。そこでわたしは足をとめた。

キッチンには涼二がいた。いつもはベランダにあるはずのイスを持ち出して、ふかく腰をしずめていた。そのイスは、わたしのお気に入りのモコモコ回転イスだった。

涼二はステンレスの調理台に肘をおき、あごを上げて小窓を見上げていた。小窓からさしこむ青白い光はシンクを反射し、いっそう、彼の横顔を明るくする。はるかとおく、純白の満月がのぞく。

「月を見ているの？」
「そうだ」

涼二は小窓のさきを見つめたまま言った。わたしはオムライスのお皿を持ったまま、しばらく、月明かりを浴びる涼二に見とれた。

おかえりも、ただいまも、帰りが遅いぞも、ごめんなさいも、ふたりのあいだでは交わされなかった。

オムライスをあたため、スツールを涼二の隣に置く。調理台のた

もとにふたりで並んで座った。満月みたいにまんまるなオムライスを食べながら、わたしも月夜をながめた。

オムライスを食べおわる。ポケットから二万円を出して、涼二の膝のうえに置いた。

「なんだあ？」

「おこづかいだよ。涼二、いつもありがと」

涼二は鼻あたまをぼりぼりかいて、

「なんだよ、きもちわるいなあ」

お札をポケットに入れた。なにも訊かれなかったので、だまつて小窓を見上げた。まるいはずの満月が微妙にゆがんで見えた。こらえるために下を向き、鼻をすする。もう一度視線をあげると、円のゆがみは決定的なものとなっていた。

「イス、交換しようぜ」

わたしは、こくり、とうなずいた。

涼二はスツールに座って、わたしはモコモコ回転イスに座る。おしりと背中が、花柄クッションにずしつと埋まる。ゆるい疲れがおそってきて、夢の中に片足をつっこんだ。

涼二はやっぱりなにも訊かない。それがわたしの心をほつとさせた。わたしは、今日の出来事をかいつまんで話した。涼二からは、相づちも、問いかけも返ってこない。ことのほか、わたしの唇は滑るように動いた。

話し終わると、いつのまにか、透明の鼻水がさらりと垂れていた。恥ずかしくなって、あわててキッチンペーパーでぬぐった。

気づけば、となりに涼二はいなかった。

振り返ると、リビングの中央で涼二がシャドーボクシングをしていた。ひたいには汗がちらついていた。

「なにをしているの」

「キリヤってやつに、金を返しに行く」

「お金を返しに行くのに、どうしてボクシングの練習をするの」

「金を返してから、ぼこぼこにする」
わたしは、キリヤの大蛇みたいに太い腕を思いだした。
「ぜったいムリだよ。キリヤ、強そうだったもん」
「おれと麻衣が組んで勝てないやつなんか、この世にはいねーんだ」
どうやらわたしも戦力にはいつているらしかつた。
お皿を洗ってから、わたしも涼二といっしょに、パンチやキック
やチヨークスリーパーの練習をした。

学校帰りに待ち合わせして、涼二と渋谷に出かけた。
利恵にキリヤのことを教えてもらおうと思っただけど、電話もメー
ルもつながらなかった。そもそも電話番号から変わっていた。

キリヤを追い求めてあてもなくあるく。今日も渋谷のひとたちは
キラキラかがやいていたが、わたしにはもう、それらは擬態にしか
見えなかった。

路上でダンスやギターを披露するひとたちは、いちように派手な
服を着こなしているが、でも、よく見ればシャツやズボンのすそは
ぼろぼろだった。

完ぺきメイクの女子高生たちは、コンビニの前でホットドッグを
食べ散らかしながら、動物みたいに手を叩いて笑う。

鼻がすぼむほどの悪臭におもわず振り返ると、はやりの髪型をゆ
らしてあるく、モデル体型のきれいなお姉さんだった。

おしゃれな喫茶店のお手洗いを借りると、床には汚れたトイレッ
トペーパーが散乱し、ハエが数匹ほど便器にたかっていた。

高価そうなスーツを着たサラリーマンが、イカサマだと叫びなが
らパチンコ店の看板を蹴っていた。

露出度の高い格好をしたオバサンが、死にものぐるいで道行くひ
とを客引きし、そのたびに通行人から煙たがられていた。

ビルとビルのあいだで、金髪のイケメンホストがこわいオジサン
二人に足蹴にされていた。

お巡りさんは路上喫煙を見すごし、韓国人らしきふたり組が母国語で互いをののしり合い、非行少女は今日も青ざめた顔で男のひとに手を引かれ、小学生とおぼしき男の子は耳ピアスをじゃらじゃらとぶらさげ、ラッパ風風の黒人がお店の裏で泣いていた。

いろんなひとたちがいる。さまざまな場所に向かって、それぞれがなにかしらの目標に向かって、肩で風を切って街をすすんでいく。ただ、そう見えていただけかもしれない。そんなの、本当にお金に余裕があるひとや、権力のある一握りのひとたちだけ。

はつきりとした目的を持っているひとなんて、この街にいったいどれだけいるんだろう。本物の自由を手にしたひとがどれだけいるだろう。わたしたちみたいに、ぼんやりとしたなにか、目的ともゴールとも呼べないおぼろげな霞みを求めて、ただ漫然としているだけじゃないのか。

気づけば夜になっていた。

わたしたちはさびれたハンバーガー屋のテラスで、ジンジャーエールを飲みながら灰色の夜空を見上げていた。晴れているのに星が見えないという、ひどく矛盾した夜空。

「そんなかなしそうな顔するなよ、麻衣。これが都会のありかたってもんだろ」

涼二の言葉を耳にひびかせた。わたしもそう思っていたところだった。都会の空はこうであるべきだと。

田舎はひとが少ないぶん、かがやく星々が景色を彩ろうとする。

都会は星が少ないぶん、かがやく人々が景色を彩ろうとする。

しかしその差は、わたしの目には歴然だった。

だから、これくらいの見栄っ張りもいいんじゃないか、そう思う。あがいて、もがいて、それでも星みたいにかがやいてみせて、もっともっと、このビルの光の届かない先、ほんとうにきれいな夜空にすこしでも近づいてくれれば、それでいいのだ。わたしは、そう思

う。

その日、キリヤを見つけることはできなかった。それでよかったんだ。わたしたちはもう、血まなこを剥いて彼をさがしあるくこともないだろう。

「おとしものです」

交番に二万円をあずけて、中央林間行き最終電車に乗った。

scene 13：エンちゃんの返球

春も目前のことだった。雪は冬休みのうちにしぼり布巾みたいに降りきつてしまい、校内の落葉樹には新芽が萌えはじめている。もうすぐ桜が見られるのだ、そう思うと、気楽な高校一年生の終わりも気にならなかった。

「麻衣ちゃん。ペンホルダーの持ちかた、そげんじゃなかった」

エンちゃんが卓球ボールを手でキャッチして言った。てつきり返球がくるものと思っていたわたしは、そのままへんなかつこうで空振りしてしまい、耳まで真っ赤になってしまった。

体育の授業だった。エンちゃんはわたしにつきつきりでラリーを教えてくれる。三学期の体育は選択科目で、バドミントン、バスケ、卓球とえらばされる。バドミントンもバスケも体力的についていけないな、と踏んだわたしは、いちばん楽ちゃんそうな卓球をえらんだ。しかし、卓球はおどろくほど人気がなかった。わたしとエンちゃんと、他二名の男子だけだ。

「こう、卵をつつむようにして、そう、それでよか」
「ありがとう」

エンちゃんは屈託のない笑みをうかべた。地元福岡弁のなまりもそこそこに、麻衣ちゃんは運動オンチやけんね、と笑った。わたしたちはラリーを再開した。

「エンちゃんって、もしかして卓球部？」

「いちおう、うん。麻衣ちゃんは？」

「わたしは、むかしから塾通いだから……」

「ははあ。麻衣ちゃん、いつも成績トップやもんね」

照れついでに、もう一回空振りしてしまった。

こうしてエンちゃんとあいさつ以外で言葉を交わすのは、じつは

この授業が初めてではなからうか。彼女はいつも教室のすみっこにいて、少数規模の交友範囲でアニメやインターネットの話をしていく。わたしも、どっちかといえば大人しいほうなので、一歩間違えばエンちゃんたちのグループに入っていたかもしれない。だが、そもそもわたしは、脳みその古いタイプの人間であった。アニメやインターネットといったサブカル文化にはついていけそうもない。しかし、わたしは今日づけでエンちゃんの弟子になったのだ。エンちゃん流卓球術の門下生である。まあ体育の授業のあいだだけ、なんだけど。

「わたし、今日は塾お休みだよ」

エンちゃんは、それがどうしたの、という顔をした。

「卓球部の見学していい？」

卓球部は、部員たった五名の弱小部だった。男子はいない。五人とも、エンちゃんみたいなの、ものしずかな女の子たちばかり。

「五人でちょうどいいよ。団体戦は五対五だからね」

これは二年生の部長、朝田先輩の言だ。

卓球台を一卓借りて、エンちゃんと授業のつづきをやった。

エンちゃんがバックスピンサーブを打った。回転ボール。わたしごときに打ち返せるものではなかった。ボールはラケットの角っこに当たり、あらぬ方向へと飛んでいく。

「イジワル」

「ごめんごめん。すっかり部活モードに入っちゃって」

そして彼女はボールを拾って首をかしげた。

「麻衣ちゃん、もしかして、卓球部入りしたい？」

「ううん。わたし、ダイエットがしたいんだ」

わたしの理想は、運動部のスラリと引き締まった足だった。かくいうエンちゃんも、おっとりした顔つきに似合わずカモシカレッグだ。

「部活には入れないけれど、卓球って、運動嫌いなわたしでもけっ

「こう楽しいかも。どうしてだろう？」

何度ラリーをつづけても最初にミスするのはわたしだったが、楽しいものは楽しいのだ。エンちゃんはフォアハンドをしゅっと振りぬいた。

「卓球って、相手との距離が近いし、球のテンポも早かろう」

「それがどうしたの？」

「なんか、会話みたいじゃん。ヒソ、ヒソ。コツ、コツって。ほら、おしゃべりのペースに似とらん？」

たしかにそうかもしれない。エンちゃんは詩人みたいなこと言うんだな、と感心してしまった。

「エンちゃんの球はやさしいから、わたし好きだよ。本人に似たんだね」

「お世辞が上手、麻衣ちゃんは」

そう笑ってから、エンちゃんは真剣な顔をつくった。

「ばってん、こげん甘か球ばつか打つとられん。部員の中じゃ、私がいっちゃんへたっぴやけんね」

「エンちゃんが？」とてもじゃないが、しんじられなかった。

「そう。このままじゃ、来年度入ってくる新入生にしめしがつかんし。今のうちに鍛えんとね」

「がんばってね、エンちゃん」

エンちゃんはおわいらしく笑って、うん、とうなずいた。

どうしてもっと早く彼女と友達にならなかつたんだろう。エンちゃんも、教室ではわたし以上に大人しいけれど、いったん話しかければ気持ちいいくらいの返事を返してくれる。ひねくれもののガリ勉が多いこの学校では珍しいくらいだ。

エンちゃんのかけてくれる言葉は、ほんとうに彼女の打つ卓球ボールのようだった。かつん、と耳心地よい音がなって、こん、と拾いやすい位置に落としてくれる。とってもやさしい、エンちゃんだ

けの返球だ。

山がピンク色に染まる。校庭にも、しだれ桜やライラックが咲いた。

四月のおわりに久しぶりに卓球部へ遊びにいくと、見慣れぬ部員がいた。部長さんが近づいてきて、その新入部員を紹介してくれた。「こちら、新入生の水谷アオイさん。強豪、山岡中のエースだったんだよ」

アオイはほつぺたを赤くして頭をさげた。卓球部の例にもれず控えめそうなコだった。

これで部員は偶数の六人になったので、わたしは遠慮して、今日のみんなの練習をながめるだけにした。アオイは、部長さんとロビングをやっていた。部長さんが決めるスマッシュやドライブを、アオイがひたすら遠くから打ち返すのである。部長さんがいくらか鋭い攻撃を放つても、アオイは受け流すようなツツキで返していく。たしかに彼女は上手だった。いともたやすくボールをさばく姿は、芸達者なサーカス団員のようだった。

エンちゃんがタオルで汗を拭きながらやってきた。

「こりゃ、負けとられんばいな」

いつもよりオジサンっぽく言うので、わたしは思わず吹き出してしまった。

s e n c e 1 4 : サラブレッド

六月、しのつく雨が降りしきる日曜日、県連盟が開催する高校卓球大会が行われた。場所は市街地にあるスポーツセンターである。部員たちは、顧問と副顧問が運転する二台の車に分乗して向かった。開催施設までは、わたしの家からけっこう近い距離にあったので、用意したお弁当を手に会場まであるいた。

選手たちのウォームアップと、梅雨の湿気も手伝ってか、会場内はむっとするような空気がたちこめていた。わたしは、うちの卓球部員をさがした。

「麻衣ちゃん、こっち」

二階の観客席からエンちゃんが手招きした。ラバーを拭いたり、素振りしたり、卓球部はもう試合の準備をはじめている。

「おやつのはババロアつくってきたんだよ。みんなの分もあるから」
一晩じゅう冷蔵庫でキンキンに冷やしておいたマンゴームースのババロア。みんなよろこんでくれて、部長さんがわたしの背中をぽんとたたいた。

「うちの専属マネージャーになる？ 西江ちゃん」

まんざらでもないわたしは、はにかんで頬をかいた。

団体一回戦がはじまった。エンちゃんだけ観客席にのこった。

「団体戦、でないの？」

「私、二回戦の三番手からやけん。片井先生はさっそくアオイを活躍させたいみたいよ」

わたしは片井先生の意向にあまり納得できなかった。アオイはあくまで新人だ。いきなり団体に出すなんて、ひいきだと思った。

「じゃあ、二回戦からがんばってね」

エンちゃんは苦笑いした。

「うん。勝ちすすんだらやけどもね」

一試合目はアオイが出た。

以前アオイが、自分は新しい環境に来るとすぐにおじてしまったのだと、自身で語っていた。たしかに彼女は緊張しているようだった。アオイの戦型は、守備を重視した、いわゆる『カット主戦型』だ。どんなに相手から攻撃を受けようとも、意地でも下回転のカットやブロックで守りきり、敵のミスやさそうのである。そのためカッターマンは常に冷静でなければいけないが、アオイはあせってスマッシュに出し、自らミスを呼んでいた。

なんとか初セットは勝てたが、結局三セット取り返され、負けてしまった。

元強豪中のエースがやられてしまったせいか、すぐさまチームの士気がおちたように見えた。勝てたのは部長さんだけで、我が校は一回戦敗退をきしてしまった。

「エンちゃん……」

おもわず彼女の顔をうかがうが、エンちゃんもどう反応してよいかかわからないようだった。

団体メンバーが観客席にあがってきて、アオイが泣きだしそうな顔でエンちゃんのもとへやってきた。

「やっぱり、遠藤先輩がでたほうが、よかつたんです……」

「そぎちゃん顔して、バチあたるよ」

エンちゃんはむりやり笑ってみせた。

「せっかく試合に出してもらえたのに。負けることは恥じゃなか。なんていうか、私なんていつつも負けよるけど……その、なんちゅうかなあ」

いいことを言おうとするエンちゃんだったが、耳がしだいに赤くなつていくにつれて、言葉ももごもごつまつていった。チヨコボールのふたを開けて、「まあ、食わんね」と苦しまぎれに言った。

「つぎ、個人戦やけん。そっからがんばれば良か」

アオイは両手をそろえて上に向け、おちてくるチヨコボールをうけとった。

「あ、ありがとうございます……」

そのあと、トイレへ向かうアオイに、わたしは話しかけた。

「エンちゃんは口べただから、たまにああなっちゃうんだよ。へんな意味はないから」

アオイは首を振った。

「あたし、むしろさっきので勇気ができました。ほかの先輩方のはげましと違ってぶっきらぼうだけど、その分、ちゃんと心のそこから言葉をかけてくれて。あたしもうまく言えないけれど、遠藤先輩って、すごくいいひとなんだなあ、って」

それを聞いて、分かっているなあこいつ、とわたしはほっとした。

「アオイは、いいコだね」

アオイはもじもじして、頭をさげた。

個人戦、エンちゃんは一回戦で負けた。もうちょっとで勝てたのに、かなり惜しい試合だった。試合後、彼女はすぐトイレに入ったが、出てくると、いつもみたいなケロッとした表情を浮かべていた。

「麻衣ちゃん、ババロア食べたーい」

そうやって甘えてきた。

二人でババロアを食べているあいだに、第三回戦で部長さんとアオイが当たってしまった。うちで生きのこっていたのはその二人だけだったので、部員全員で体育館に降りて、二人まとめて応援した。

「アオイ、ちょっと」

一セット目を勝ち取った部長さんが、アオイを呼んだ。アオイはすこしたじろいで、部長さんのもとに来た。部長さんの目は真剣だった。

「あんた、手加減しなくていいからね」

つづいて、二セット、三セット、四セットと、アオイは点数的にも大差をつけて部長さんを下した。アオイは煮えきらないような顔

をしていたが、部長さんは逆にすがすがしそだった。

「やっぱり違うねアオイは。まったく、手も足もでなかった。間違いないくうちでもエースになれるよ」

エンちゃんが伏し目がちに、斜めしたへと視線をそらすのが分かった。

アオイは準々決勝まで勝ちあがったが、そこで引退前の三年生とぶつかり、ストレート負けで幕をとじた。

顧問の片井先生が声を低くして、「気にするな。水谷はこれから伸びるんだから」とアオイをほげました。

ミーティング前の休憩で、スポーツセンターの外に出ると、迎えにきたエンちゃん家のおじさんがやってきた。わたしはおじさんと自己紹介しあった。それからおじさんは、わくわくした顔つきでエンちゃんを見た。

「どぎゃんやった?」

「団体戦は一回戦で負けちゃったけど、個人戦で、私は三回戦までいった」

我が校期待の新人に叩きのめされたけどね、と、エンちゃんは呼吸をするようにウソをついた。団体戦も出させてもらえたんだという口調で、わたしのほうは一切見ずに。

「じゃ、これからミーティングあるから」

施設へと走っていくエンちゃんを、わたしは追わなかった。ほんたいに、駐車場に戻っていきこうとするおじさん呼びとめた。

「どうしたんだい?」

しかしわたしは、なにも言えなかった。だまってうつむく。やっぱり、なんでもないです、そう言ってエンちゃんたちのところへ行こってしまおうと思った。

「ジュースとコーヒーなら、どっちがいい?」おじさんが言った。

「コーヒーがいいです」わたしは後ろめたさでうつむいたままだっ

た。

植え込みの縁石におじさんと並んで座って、おじさんからおごってもらったコーヒを飲んだ。

「真弓は、サラブレッドなんだよ」

真弓とは、エンちゃんのことである。おじさんは煙草に火をつけた。エンちゃんと話すときと違って、ただし標準語を使っていた。「うちの居間にかざってあるんだ。おじさんの若いころの写真。あのときのことは、いまでもよく覚えている。高校卓球インターハイの団体戦、第四回戦だった。おじさん、当時はマイナーなシエイクハンド選手でね。かつこよく、スパーン、とスマッシュを決めた、まさにその瞬間を切り取った写真だった」

「おじさん、強かったんだね」

「まさか」

おじさんはちいさく笑った。

「そんなときのコーチがおせっかい焼きでね。部員一人のこらず、一回でも試合に出してあげようって。それで父兄を喜ばせてやるうって、そういう先生だった。嫌みも悪気もない、いい先生だった。おじさんは、お情けで出してもらっただけなんだ。おじさんね、たぶん、いまの真弓よりぜんぜん下手くそだったよ」

断言するあたり、愛情からくるお世辞だろうか。

雨あがり。綿毛のような雲が浮かぶ、青い空を見上げた。おじさんの吐く白い煙が、雲にまざって姿をくらませる。わたしはコーヒを飲む。

「真弓、勘違いしちゃってたんだ。パパは強かったんだって。自分はサラブレッドなんだって。たった一枚の写真、たまたま体よく打ち込めた、たった一度っきりの、あのスマッシュに。おじさん、真弓のことだましてんだ」

微糖は、ちよつとだけ苦かった。

「おじさんもウソついてるんだから、真弓とはおあいこさ」

おじさんは吸い殻をつぶして縁石を立った。

scene 15 : やさしいボール

アオイの成長はすさまじかった。メンタル面が安定しないのが弱みらしいが、本気さえ出せば、部長さんでも一セットも取れないだろう。

他校との練習試合などでは、エンちゃんも団体戦に出ることもあったが、もはや主戦力はアオイに固定されつつあった。

エンちゃんは、気にしてませんよ、当たり前じゃない、って顔しているけど。わたしには、彼女の心境の変化が手にとるようにわかった。

体育や部活でラリーの相手をしてもらうとき、エンちゃんの球は日に日に粗くなっていく。あせっているような、向こう見ずな、力まかせな球だった。エンちゃんは、前みたいにやさしく打ち返しているつもりみたいだった。だけど、わたしにはわかった。

こんなことがあった。アオイとの練習試合で、エンちゃんはアオイから一点も取れなかった。

「今朝から、おなかの調子が悪かつちゃんね……」

ぼそぼそと、だれにも聞こえないような小さなつぶやきだった。

「だいじょうぶ？ 保健室いく？」

だれにも聞かれなかったと思っていたらしく、わたしが心配して声をかけると、エンちゃんはバツが悪そうに口をつぐんだ。

エンちゃんはそうやって、徐々に自分のペースを見失い、試合のたびにおじさんにウソをつく。べつに口止めされたわけでもないが、わたしはいつも、そのウソの報告をだまって見届けた。

「私、期待されとるけん。いつも負けとるって知られたら、パパに顔向けできんもん」

エンちゃんがいつかそんなことを話した。彼女の目元には影がお

ちていた。おじさんは、エンちゃんのウソに気づいている。エンちゃんも、ほんとうは気づいているのだろう。おじさんの過去の栄光が、じつはウソだったってことに。自分がサラブレッドなんかじゃないってことに。

そんなことが度重なり、どうしていいかわからなくなったわたしは、ある日、わたしの部屋にやってきた涼二に相談してみた。

涼二は、サボテンのトゲを愛おしそうにさわりながら、口をひらいた。

「どうしようもなにも、麻衣にはなんにもできないだろう」

「どうして？ エンちゃんもおじさんもウソをつきあって、しかもお互いのウソに気づいているんだよ。こんなの、もやもやじゃん」

「しゃーない。うまくいかないのに、それでも親や子に自慢しなきゃならんときは、これはもう、ウソをつくしかない。スポーツって、実力がすべてだもの」

「実力……」

スポーツマンじゃないわたしには、共感しえないことだった。

八月、全国高校卓球大会の予選が行われた。

片井先生が発表する団体メンバーは、今回もエンちゃん抜きの人だった。団体戦に向けて準備運動をはじめ五人をしり目に、エンちゃんと試合会場の外に出て、いっしょにピノを食べた。

会場入り口の脇に、落葉小高木が植えてあった。樹皮はすべるように滑らかで、枝のさきには薄紅色の花が咲いている。無言がつづいたので、ひまつぶしに頭の中で植物図鑑をひらいた。たしかこれは、百日紅の木。夏のあいだじゅう咲きつづける樹木で、幹がツルツルして猿も登れなさそうだから、百日紅と書いてサルスベリと読む。

エンちゃんは百日紅の幹に背をあずけた。

「応援する気、だんだんなくなってきた」
と彼女は言う。

「スポーツは実力の世界やもん。私が弱いのがいけんのやし、仕方なかといえは仕方なかとやけど……」

実力という言葉を、エンちゃんも使った。エンちゃんは自己嫌悪気味にかぶりを振って、ピノをもう一つ食べた。

「あー、もう。私はホントしょんのかなあ」

「しょんなか？」

「どうしようもないヤツ、って意味」

「どうして、エンちゃんがしょんのかなとね？」

「博多弁うまかじゃんけ、麻衣ちゃん」

エンちゃんはげらげら笑った。わたしは笑い返せなかった。そんなことを言い出すエンちゃんに、わたしは何故だか、泣いてしまっそうだった。

「しょんなくないよ、エンちゃん。練習がんばってたじゃん。ここでこそ個人戦で勝って、先生に見直してもらえばいい」

「ムリだよ。私、だめだめやもの。だって私、みんなが団体戦で戦つとるときに、応援するフリしとるだけなんだよ。ホントは、はやく負けなかって思つとるもん。ちゃっちゃと負けて、はやく帰りたいなって、思つとるもん。こげんしょんのなか選手が、勝つるわけなかもん……」

エンちゃんは言葉尻をちいさくして、細かく鼻をすすった。

団体戦は四回戦までですんだが、ここにきて去年の優勝校と当たった。一番手のアオイだけはなんとか辛勝できたが、チームはここで敗退してしまった。

つぎは個人戦である。トーナメント表を見たわたしは、すぐさまエンちゃんに歩み寄った。一回戦を勝ちすすめば、アオイと当たる組み合わせだったのだ。

「エンちゃん、チャンスだよ」

エンちゃんをつつむ空気は暗かった。

「私、すくなくとも二回戦負けじゃんね。もし一回勝てたとしても、アオイと当たるんじゃないなあ」

「勝てなくてもいいよ」わたしはつよく言った。「がんばればいいんだよ」

わたしはこういう勝負ごとに関してはからつきだし、うまくア
ドバイスできないが、これだけは言える。エンちゃん、がんばるだ
けでいいんだよ。ふてくされるばかりじゃいけないんだよ、って

エンちゃんのシングル一回戦で、わたしは部長さんとアオイをた
ずさえて彼女の試合を観戦した。一セット目は相手が先取。二セッ
ト目は六対二点で、またしてもエンちゃんが押されている。

「エンちゃん、なにがいけないと思う？」

部長さんとアオイはフェンスにびったりくっついて、エンちゃん
の動きを観察した。

「ちよつと、フットワークが固いかな」

「あとは、相手の弱点をもっとついた方がいいと思います。相手、
左右のゆさぶりに弱いみたいです」

わたしは一階に降りて、エンちゃんのセコンドについた。

「エンちゃん、もつとリラックスだよ。足をうごかして。それに相
手のひと、左右のゆさぶりに弱いみたいだから、やってみて」
二人の助言をまるばくりした。エンちゃんはためらいがちに、や
ってみる、とうなずいた。

エンちゃんは最後までねばり、ぎりぎりで勝利をおさめた。それ
でもエンちゃんの顔色はよくなかった。これからアオイと戦うから
だろう、そう思ったが、どうやらそれだけではないようだった。

「一回戦勝ったって、パパにメールしたっちゃけど。そしたらパパ、
いま会場のちかくにいるから、見に来ていいかって」

「いいよって返しなよ、エンちゃん」

エンちゃんはおどろいてわたしを見た。わたしは、もしかしてお
せっかいなことをしているのだろうか。クミカやノブテル、利息の

ときみたいに。

「負けることは恥じゃなかった、そう言ったの、エンちゃんだよ」
そしてわたしはアオイの方を振り向き、「あんたも、手抜いちゃだめだからね」と言った。エンちゃんは携帯をにぎりしめて、下を向いた。卓球部の全員がエンちゃんに視線をおくっていた。

エンちゃんは、今日だけでやたらゆるくなつた鼻をすすり、意を決しておじさんに電話をかけた。「もうすぐ始まるから、はやくきて」、そう告げた。

「アオイ。私なんかに負けたら、鼻水だして笑っちゃるけんね」
アオイはぼかんとしてから、「はい！」とおおきく返事をした。

わたしはエンちゃんのセコンドにつく。部長さんはアオイについていた。頭上の観客席からは、おじさんと、ほかの部員たちが見まもっている。

第一球目、アオイが新幹線のように速いサーブをはなつた。エンちゃんは打ちそこねる。だけど、彼女の顔にはもう驚りはなかった。
一、二セットとアオイに取られるが、次セット、エンちゃんは巧みなストップレシーブとねばり強いドライブを上手に使い分け、見事アオイから11点をもぎとつた。

これで一対二セット。あいかわらず、エンちゃんにあとはない。
わたしはかたく目をつむった。

「エンちゃん、がんばれ！」
そして白球が打たれた。

あれから、数週間が経つ。

アオイは個人トーナメントで準優勝をかざり、インターハイ進出となった。彼女はいま、都内で全国の卓球プレイヤーと戦っているだろう。

わたしたちは結果報告を待ちながら、体育館で練習していた。練

習のあいまに食べようと思い、ギンガムの布バッグにおにぎりをたくさん入れてきた。「こらまた、かわいいバッグやね」とエンちゃんに笑われたけど、わるい心地はしなかった。

「エンちゃんの球、やさしくなった」

ラリーをしながらわたしは言う。ラリーばかり半年もやっているものだから、五十回はつづけられるようになった。どことなく、太ももや二の腕が細くなった気がする。

「そうかなあ」

エンちゃんは、いまいちピンとこないようだった。

「そうだよ。エンちゃんの球、やっぱり好きだな」

やさしくて、マイペースで、純朴。かつん、となつて、こん、と落ちる。エンちゃんだけのやさしい球。

がんばるだけでいいんだよ、エンちゃん。自分だけの、きみだけのペースで、エンちゃんはがんばればいいんだ。

かつん。

エンちゃんはなんだかハラオチした様子で、ふっとほほえんだ。

わかったよ。そう言われているみたいだった。

こん。

「もしかしていま、会話できてた？」

「うん、たぶん、できとったよ」

感激して、おもわず空振りしてしまった。

scene 16 : なくす音

「擬音つておもしろいよな」と道彦くんは言った。

図書館の自習室。そのすみっこテーブルを陣取つて、銀河鉄道の夜を読む。だんまりしていると、道彦くんは天井をあおいで「しいん」と言う。

「音にならない音つて、どうして『しいん』なんだろう。ぼくはむしろ、『きいん』だと思うけどな。ほら、あんまりしずかだと耳鳴りがしてこない？」

「わかるけど」とわたしはあいづちして、「でも、わたしはちょっとちがうかな」

道彦くんは食べようとしたフリスクをテーブルに置いて、かるく身をのりだした。

「ちがうつて？」

「『きいん』は、なくなったときの音なんだよ。なくなったときだけ、耳鳴りがするんだ。きいん、きいん、つて」

「なくなつたとき。たとえば？」

「たとえば……」

彼の望むような返答は思い浮かばなかった。だつてこの音に気づいたのは、わたしだつてつい最近のことなんだから。

いつのまにか道彦くんの目は文庫本へと戻っていた。小学生のころと変わらずマイペースなままだった。

「どうしてこつちに戻ってきたの？」

「親父がリストラにあつてさ。向こうのマンションのローンが払えなくなつたから、こつちの実家に戻ってきた。情けない話だけど、高校出たらぼくも働くつきやないよな」

彼の目は見られなかった。昔のとおりなのはわかるが、勝手なうしろめたさかられて、目をそらした。わたしは恵まれた子供なんだつて、いつか利恵に言われてしまったから。そんなこと、気にす

る必要のないのに。

「野球、もうやめちゃったの？」

「うん。最近はバイト漬けだし……」

そっか、つぶやいて、わたしも手もとの本へ視線を落とした。

わたしたちは図書館を出た。偶然の再会だったけれど、べつだん盛り上がるようなこともなかった。道彦くんは毎日いそがしいというし、学校も別だし、次にいつ会えるかもわからない。連絡先を交換するにも、わたしはふだんから携帯電話を持ち歩いていなかった。

家に帰って、夕食を食べたあと部屋にはいった。携帯に涼二からメールがきていた。

『二万勝った』

涼二は上京し、都内の公務員専門学校に通っている。安いアパート暮らしで、パチスロにはまっているのだという。こうことばっかり報告してくるのだ。

涼二の部屋は以前のままにしていた。学習机の上の怪獣人形にはほこりがたまっている。手にとって持ち上げると、怪獣の足あとが残った。ベッドに腰かけて目を閉じると、黴びたにおいが目立って鼻先をさわった。

そのうち掃除してあげよう、と思った。大晦日には帰ってくると言っていたし、きれいにしておくと思ふだろう。

きいん。

音が聞こえた。

さみしくないとさえばうそになる。でも、いなくなったからどうというわけではない。新幹線の改札で涼二を見おくらるときだって、はやく帰って本読みたいなあ、なんて内心考えたくらい。

ただ、この無人の部屋の空気はわたしの全身をさいなんだ。空間に重みがなくて、やけにすかすかだった。目を閉じただけで六帖の

間取りが果てしなく広大に感じられる。たった一人ぼっち家からいなくなるだけで、どうしてこんなに広くなってしまっただろう。

きいん、きいん。

なくすって、つまりこういうこと。とても身近で、ありふれていて、とりあげて悲しむことでもないのだけ。これもたしかに、なくすってことなんだ。

瞼をおしあげる。携帯をひらく。登録された涼二の番号を呼び出して、通話ボタンを押しこんだ。

「どうしたあ」

一ヶ月と九日ぶりに聞く声だった。

W大学文学部を受験したところ、今年一月、内定をもらった。四月から電車で一時間ほどのキャンパスまで通うことになる。涼二のようにアパートを借りるか、学生寮にはいってもよかったが、大きくなってしまったサボテンの置き場所に困るだろうし、なによりわたしはこの町がすきだった。

合格祝いの翌日、こたつで寝そべりながらお正月番組を観る涼二に、初詣へいこう、とさそってみたが、ことわられた。せつかく帰省したんだからゆっくりさせろ、とのことである。

かなしかつたけど、意地をはって一人で出かけることにした。セーターの上にねずみ色のダブルコートをかさねて着た。外に出るとおもいのほか寒かったので、いったん戻ってぼんぼりのあたたかいニット帽をかぶり、毛糸のでぶくろをした。もう一度玄関を出る。

小高い山の上には、三が日ですら無人の神社があるらしい。

活気のうすい商店街を抜けると、山頂への小道をすすんだ。お正月なのに、それともお正月だからか、道中で人とすれちがうことはなかった。ひどくしずまりかえており、木々のざわめき以外はな

にも聞こえない。

無音をあらわす言葉として「森」というのがある。わたしが「森」にはじめて出会ったのは、おそらく銀河鉄道の夜。「しいん」、と宮沢賢治は表現した。

わたしも、無音には「しいん」だと思う。

だけど道彦くんは「きいん」だと言う。しかしわたしの中での「きいん」は、なくなったときの音だった。

やがて山頂付近の分かれ道に到達した。尾根へとつづく道をえらび、さらにあるいた。尾根の途中に、その神社はあった。

神主さんも参拝客もいないので、地面は枯れ葉でいっぱいだった。がしやり、がしやりと葉をふみながら、石造りの古い鳥居をくぐる。手水舎には濁った雨水がたまっていた。柄のへし折れた柄杓が地面にころがっていた。

お金をそつとお賽銭箱に入れ、手を合わせる。本坪鈴はない。鈴緒だけが頭上にだらんとぶらさがっているだけだった。

お参りを終えて、お賽銭箱のとなりにすわった。くさった板床のみしり、という音が鳴る。頭を柱にあずける。苔っぽいかおりがした。足もとには、枯れかけのサニレタスみたいな花があった。頭の花図鑑をひらく。葉牡丹だ。

わたし、いつたいなにやってるんだろう。せつかくのお正月で、なんでこんなところにいるんだろう。万が一ここにひとが通りかかったとして、「そんなところだなにをやっているんだ」と訊かれれば、わたしはなんとこたえる？

初詣です。両親は親戚のところへ行っているし、兄をさそつても来てくれないので、ひとりでお参りしています。近所の稲荷神社はひとがいっぱいなので、ここに来ました。わたしはひと混みがきらいです。

ぜんぜんだめだ。わたしが不審者なことに相違ない。

とどのつまり理屈なんかないんだ。わたしはたぶん、「しいん」の上位互換である「きいん」をさがしたいだけ。特別な日だからこ

そ、こういう天の邪鬼な無意味さがしをしたくなる。わたしはそういう人間であった。

苔のはえた柱に寄りかかり、わたしはゆっくりと目を閉じた。

むかし、もつとも「きいん」に近い体験をしたことがある。

小さいころだった。自分がどれだけ小さいのかわからないくらい、小さかったときのこと。

今日のような冬の夕方だった。ゆりちゃんと涼二と三人でこたつにはいり、わたしはうたた寝をしていた。なにか夢を見た気がするけど、いまとなっては思い出せない。

目を覚ませば、まわりにはだれにもいなかった。こたつ布団から半身をあげた状態で、わたしはしばらく固まった。

縁側の窓から夕日が差しこみ、手もとの畳まで伸びていた。まっ赤な夕日が目を刺激した。音はどこからも聞こえてこない。ここにはだれもいないんだって、わたしは自分の直感をしんじた。

きいん。

耳鳴りがして、体じゅうを駆けめぐっていった。

きいん、きいん。

わたしはひとりぼっちになってしまったんだ。この世界には、もうわたし以外の人間はいない。真面目にそう考えたし、心にはぼっかりと、巨大な黒い穴があいたみたいだった。

きいん、きいん、きいん。

泣こうにも泣けなかった。ひとりぼっちになれば困るという、それすら理解できないほどわたしは小さかった。ただ、むねのあたりはドキドキしっぱなしだった。この耳鳴りに呼応するように。こたつ布団をかぶって、長いあいだ音とたたかった。

床板からおしりをあげる。神社の境内から、暮れなずむ町を見お

ろした。焼かれてしまいそうなほど赤い町並みがそこにはあった。
もし、この世界が終わってしまったら。その瞬間をわたしは想像
する。

きつとこんな感じだ。

こんな風に、ひっきりなしに音が響いていく。町じゅうから「し
いん」があつまって、叩くような耳鳴りを生む。やっぱり「きいん」
だ。涙も出てこないくらい、かなしい音。

はっ、と息を吐く。視界のはしに白い湯気が立ちのぼる。

「きいん」

町の一角で風があがると、耳鳴りは止んだ。

scene 17：恩人のエリリ

講義室の一角にて、となりに座ったひとから、じろじろと顔を見られた。ちよつとイヤな気もちになったけれど、わたしはなにも言わず、じつとそのコを見つめかえした。

そのコの目はおっきかった。わたしがいま腕に付けている時計盤の、たぶん1・2倍はある。髪をツールにしており、毛先には金色に染髪されたあとがのこっていた。髪型のせいも、キツネみたいにしゅつとしたあごのラインが目立った。両耳にはピアスの穴があいている。かんじんのピアスはない。

そのコはおっきな目を細めた。うたぐり深く、どこかいじわるな目つき。

わたしたちはその状態で、およそ二分ほど見つめあった。かといつてなにか言葉を交わすわけでもなく、ただただ、お互いの瞳をよく観察しつづけたのだった。

やがてそのコは、ヘアバンドのついた手首を頬にあて、頭をささえて首をかしげた。

「だいぶ落ち着いてきた、キミの目」

そのコは、唇のはしをあげて笑った。意味がわからなかった。

「新歓のときなんか、キミ、ずーっとときよろきよろしてたのにな」
新歓と聞いて、しぜんと眉根が寄っていくのがわかった。八の字
いわゆる困り眉である。そのときのことを思いだして、とたんに胃
が痛くなる。

「わたしのこと、見たの……」

「見てたよ。キミ、オリから放り出されたニワトリみたいだったもん。同じ場所をいつたりきたり、あっちこち見まわして、まさに拳動不審ってカンジで」

彼女の声のトーンは、台詞にあわせて徐々に大きくなっていった。まわりの聴講生が怪訝に振りかえる。講師がせき払いすると、その

「こも、調子をあわせて喉をごほんと鳴らした。」

「あたしのこと、覚えてないんでしょ」と、彼女は衣ずれのような声でささやく。「あたしは覚えてるよ。西江さんでしょ」

ぼうつとして、返答にこまっっていると、そのコはあきれたようなため息をついた。

「ほら、キミがボーボーしたとき、介抱してあげたじゃん」

「あつ」

わたしの青ざめた顔は、いっしゅんで熟れた赤色へと染まっていた。そのコの手もとに置かれた立てかけ式の手鏡に映り、わたしはそんな、自身のひどい顔色を知ったのだった。

入学してまもなくのことだった。一年生をあつめた、新入生歓迎会のイベントがおこなわれた。伊豆のコテージを借りてキャンプをする。先輩たちと一晚をともし、親睦を深めるというものである。自由参加だったので、とうぜんわたしは行く気がしなかった。しかし、

「一発目の飲みくらい参加しなきゃ、このさき友達づくりで苦労するよ。友達のいない大学生活はつらいよ。お義母さんも一回、そのせいで腐りかけたからね」

と、ゆりちゃんにおどされ、しぶしぶわたしも参加することになったのだ。だけど、その選択は安易すぎた。元来からの人見知りであるわたしにとって、キャンプは最悪のものとなった。

終始、わたしはだれとも話せなかった。話しかけられても、氣の利いたおもしろい返事はできなかった。そもそも、みんながすすんで話題にあげるような、テレビ、インターネット、芸能人、漫画、ファッション、その他さまざまな俗っぽいジャンルには、とてもついていけなかった。

山登りでは、わたしをはさんだ前後のコたちが、ツバを飛ばしあ

いながら熱心に会話していた。いたたまれなくなって、わたしはじつと自分のつま先を見つめた。

浜辺では、砂のお城づくり大会がおこなわれた。わたしはどのグループにも属せず、ずっと公衆トイレにこもり、本を読んで時間をつぶした。

夕食のカレーづくりでは、人目のつかぬところにかくれ、ひたすらニンジンやジャガイモの皮をむき、その後は、悪いとは思いつつも林の中を行ったり来たりしてカレーが出来上がるのを待った。

夕食後。そろそろ寝るのだろうと安心しきっていたら、コテージ内で酒盛りがはじまった。同コテージ内のメンバーは、みんなわたしと同じ、十八歳の女のコたちだった。しんじがたいことに、みんなお酒のことをよく知っていて、知識自慢までできて、そしてアルコールの免疫をそれなりに身につけていた。

わたしは木製ベッドの二階で寝たふりをしていたのだが、そうしていると酔っぱらったコがわたしのところまで上がってきて、「のめ。世界が変わるぞお」と缶ビールを差し出した。おずおずとそれを受け取る。すると、部屋じゅうに謎の音頭がこだまし始めた。

なーんで持つてるの。のみたいから持つてるの。
わけがわからなかった。わけがわからないまま、わたしは缶に口をつけた。

もともと胃が痛んでいたのと、周囲からのプレッシャーも加算され、とどめに未体験のアルコール投入である。いつきに鳥肌がたつて、頭髪の毛先がぴんと逆立った。

わたしはコテージを飛び出し、ちかくの沢で、おなかの中のものをぜんぶ吐いた。ちょっとだけ涙がでてきた。わたしは、友達の手くり方を忘れてしまったらしかった。このありさまで、いままでどのように人間関係を成立してこれたのか、自分でも不思議なくらいだった。沢のまわりはひとの気配がなかったので、そこで思いつきり泣くことにした。

しかし、涙はほとんどでてこなかった。こんな目にあってまで、

ちよつと涙目になるくらいだった。わたしの人生において、このキャンプは、その程度の苦難でしかなかったということなのだろう。

ふと、わたしの背中をさするものがあつた。どうじに声をかけられた気がしたけれど、川のせせらぎ以外はうまく耳にはいつてこなかった。わたしが返事もできない状態なのだとわかると、そのひとは、だまって背中をさすりつづけてくれた。そのときのわたしは、あまりの恥ずかしさで面をあげられなかった。なので、そのひとの顔は確認できずじまいだった。そのまま、わたしは貧血で意識をうしなつた。

あの上きは大変だつたんだからね、とエリリは話した。エリリとは、さきほどのツーカーのコだ。つまりキャンプのときにわたしを介抱してくれた恩人だが、エリリというのが本名かどうかはさだかではない。たぶん、愛称なのだろうと思う。

わたしたちは大学ちかくの古本屋さんにきていた。哲学科教授が出版した教本を買うためである。教授の口ぶりでは、自分の本を買つて講義を受けなければ、とても単位は取得できないであろう、とのことであつた。

だが、構内で売られていた彼の本は、四千五百円と高額だった。「詐欺だよ詐欺、こんなもん」とエリリは口をとんがらせる。

「わたし、このまえ教授の本見たよ。近所の古本屋さんでだけど…」

わたしの声はありえないくらい小さかつたらしく、すくなくとも二回は聞きかえされた。

というわけで、エリリといっしょに、古本屋さんで教授の本を買つた。七百年でたたき売りされていた。マックで斜め読みしてみる。内容はやけに理解しづらく、ただむつかしい単語を羅列しただけのように見えた。一般向けじゃとうてい売れないだろうな、とわたし

は思った。

「難しいことを難しいままに説明するのって、ぶっちゃけ、馬鹿でもできるよな」

エリリの意見に、わたしはおおむね同意だった。

scene 18 : 土壌と空気のはなし

エリリはとても広い交友範囲をもっている。

たとえば、他学部の生徒など、わたしにとっては同じ学校に通っている気さえしないほど遠い存在に思えてしまうのだが、彼女にしてみれば学問の垣根など意味をなさないようだった。いっしょに校内をあるいてみればわかるが、エリリは男女学生職員とわず、さまざまな者から声をかけられる。入学から半年も経っていないのに、どうすればそういった人脈を築けるのか、こちらとしては不思議でならない。そのため、エリリが呼び止められるたびに、わたしは手持ちぶさたに足を止めなければいけなかった。

それでもエリリは、できる限りわたしと行動をとにした。わたしがひとりぼっちなのがよほど気にかかるらしい。

わたしは拒絶しなかったし、もし拒んだところで、いちばん困るのは自分だと思っていた。学生にとって友人間の情報交換とはかなり重要な役割をになっている。なにより、なまじエリリという友だちができてしまったせいか、わたしの内にかくされたさみしがり屋っぷりがここにきて再燃してしまった。もうひとりぼっちで食堂の昼食をやり過ぎるのはごめんだし、教授に質問されてうまくこたえられなかったときの空気は死にたくなるし、わたし抜きで盛りあがるグループ学習はすぐ涙目になってしまう。いままでは自己完結な妄想でどうにか逃げてこれたが、やはりそんなちやちな現実逃避など、限界のようだった。

エリリと話すようになってから、わたしはほとんど初めてというていくらいそれを思い知らされてしまったのだ。

そんなおり、運よく、例によってエリリ経由で知ったサークルに

所属する機会を得た。非公認の園芸サークルである。

活動拠点の畑や花壇は、わたしもよく利用する図書館のうら側にあった。とはいえ、ほとんどお遊びみたいなもので、土台もたいした広さはない。ほんとうに興味でやっているようなひとたちばかりだった。いちおう、学園祭のときなどは鉢植えや花の苗などの露店をひらくらしいが、最小限の活動方針がわたしにはしっくりきてしまうのだった。

そのサークルには、ひと一倍、園芸にくわしいひとがいた。二年生のクロキさんという女のひとで、ひととおり植物にかんして精通しているわたしでも、彼女の知識量にはたびたびおどろかされた。

その日の活動は、ブルーベリーの成長にあわせて、土に肥料をほどこすというものだった。わたしは今までブルーベリーにせつする機会がなかったので、クロキさんに、ブルーベリーの肥料について訊いてみることにした。

「ブルーベリーを育てるときは、やっぱり土壤がポイントになってくるわね」と彼女は語った。「ブルーベリーってめずらしいものでね、酸性の土を好むのよ」

「酸性の土、ですか？」

「そうよ。ですから、肥料はアンモニア態窒素を維持しておく必要があるわけね。窒素の大別はわかるよね？ 硝酸態窒素とアンモニア態窒素。PH5.5以上になると硝酸化成菌の働きがよくなってしまうから、PH5.5以下の土、つまり酸性土壤をつくってあげることがブルーベリーにとっては居心地がいいわけ。麻衣ちゃんも、『酸性土壤なんて珍しいなあ』と思うのも無理はないわ。ジャガイモや茶葉、ツツジなんかにも酸性土壤がいいけれど、それでも一部だものね。そういう特異な環境を好むのは、やっぱり少数派。酸性はアルミナが活性化するし、有用な微生物も死んじゃうでしょ？ そういう意味では、ブルーベリーって孤独なのよ。現実にもいるじゃないそういうひと。まわりと同じ土じゃやっていけないっていう、そういうひと」

熱心にあいづちを打つ。背中には汗がたらりとながれていた。

ぶつちやけ、クロキさんがなんの話をしているのか、わたしにはさっぱりだった。植物に精通しているだなんてうそぶいていた自分が、はなはだ馬鹿らしくなってくるじゃないか。わたしはかんぜんに、知ったかぶりの勘違い女であつたらしい。

「どうしてクロキさんは、農学部のある学校に行かなかつたんですか？」

彼女はお上品にほほえんだ。

「わたしのこれは、ただの趣味ですからね」

ファミレスでの勉強のあいま、クロキさんとのメールのやりとりを楽しんでいたら、エリリが眉間にしわをよせて言った。

「クロキってやつ、あんまり関わらない方がいいと思うな」

「どうして？」

「だって、あきらか変わりものじゃん。お嬢さまだし、無駄にきれいだし、いっつも気味わるいくらいニコニコしてるし。ああいうタイプって裏ではなにしているかわかんないよ。なーんか宇宙人みたいほら、もとの姿じゃ地球の空気にあわないの。擬態してごまかしてるみたい。わかる？ ぜったいあいつ、調子よくまわりに空気あわせてるだけなんだよ」

エリリの言う空気のたとえば、クロキさんの土壌の話にどこか似ていた。なるほど、とわたしは思う。環境にそぐわないと、そのひとは変わりものと呼ばれてしまうらしい。ちょうど、畑から植木鉢に分けられてしまう酸性土壌のブルーベリーみたいに。

ところがわたしには、どうもクロキさんが変わりものというふうには見なかった。まわりと同じ空気や土壌を共有できないという意味では、むしろ、友達のひとりもまともに作れないわたしの方が変わりものである。ちょっと、かなしいことだけね。

でも、このままでもいいやといまは思う。まわりと環境がちがっ

ても、すばらしい作物や花をつちかうことは確かにできるのだから。これも、ちょうどブルーベリーみたいに。

すくなくともわたしは、ちよつとずつではあるけれどもこの大学生活に慣れてきた。友達がすくないからってなんだ、関係ないや、といまなら声を大にして言える（実際にやれと言われればこまるが、これは気もちのありようなのだからかまわない）。

わたしは真剣な顔をつくった。

「空気や土壌なんて関係ないんだよ、エリリ」

「ドジョウ？」

エリリは腕ぐみして、あたしは淡水魚の話なんてしていないんだがなあ、とぼやいた。へんなところで鈍感なエリリはかわいかった。

scene 19 : ブルーベリー

学校がえり、エリリとショッピングセンターに寄り道した。パスタ専門店にはいり、デュラムセモリナ粉とやらで仕上げた生麺パスタを食べた。エリリはバター醤油パスタで、わたしは、きのここと蒸し鶏と梅しその黒胡椒あえ和風パスタを注文した。ほんとうにそういう名前だったし、なんだかミヨウな味がした。

それからふたりで夏服を物色して、エリリのCDえらびにつきあった。そのときエリリが「なんかデートみたいだね」と言ってきたので、まともにデートも経験したことのないわたしは、心底照れくさかった。

さいごに話題のジブリ映画を鑑賞して、ミストで一時間ばっかし感想を討論しあい、電車に乗った。

「今日はうちに泊まってきなよ」とエリリが言った。

そういうわけで、ゆりちゃんに電話をした。友だちの家に泊まっていたかという旨をつたえると、ゆりちゃんは二つ返事でOKしてくれた。

「お父さん、心配しないかなあ」

「だいじょうぶじゃない？」

ゆりちゃんがだいじょうぶと言うのならば、それはだいじょうぶということなのだろう。

帰りがけに、コンビニで缶ビールを三本買った。わたしがじゃなくて、やっぱりエリリが。アパートにはいると、わたしたちは飽きもせず、ジブリ映画を観た。エリリはそうとうなジブリマニアで、DVDをほぼ全作品そろえていた。宮崎駿のヒゲの感じについてあつく語りながら、ビールと焼酎をのみまくっていた。酒豪である。「ねむいー」と、わたしにもたれかかってくるかと思つと、すぐに寝息を立てはじめた。

「エリリ、寝るなら髪くらいとかないと」

ツーンと片方の片方のむすび目をといてあげる。もう片方は、エリリ自身の乱暴な手つきでといていた。肩にのつてくるエリリの寝顔を見ると、かるくアイメイクをしているらしかったので、わたしは「お風呂はいつてきなよ」とすすめた。

「いつしよにはいつてよお」

酔っぱらいの言うことは過激だった。

「子供みたいなことやって、甘えちゃだめだよ」

「いけず」

そこで、ほっぺたにチューをされかけた。さすがに引いてしまつて、やっぱりと避けながら、エリリをお風呂場へとつれていった。

お風呂からあがると、エリリはさっそくベッドにもぐつてしまった。わたしもシャワーを拝借して体を洗い、それから寝ようと思つたが、どこに寝ていいものか、そもそも予備の布団などはあるのか、他人の部屋というのはまったく勝手がわからなかった。

「エリリ、わたし、どこで寝ればいいの？」

ぐったりしたエリリの体をゆすると、おっきな目がうすく開いた。「このベッドだけ。ひとつしかないよ」と彼女は言う。

わたしは困惑した。そもそも友だちの家に泊まるということじたい小学生以来のことであつたので、すくなくとも緊張していた。昔は、友だちの家へ大所帯でお泊まりしにいたので布団が足らず、二人一組でいつしよに眠つたが、そのときのわたしたちは十歳にも満たないほんの子供であつた。したがってへんな意識もなかつたし、むしろたのしかつた記憶がある。

たとえ同性とはいえ、わたしたちはもう、十代終盤もいいところだつた。

しかたがないので、エリリのとりに恐る恐る横になる。エリリは酒くさかつた。ぜんぜん、あのころの感覚はもどつてこなかつた。

あさい眠りから覚める。

台所のほうで、エリリがコップについだ水を飲んでいた。キツチンの薄黄色の照明が、その横顔を照らしていた。ツータールをとくと、うしろ髪は背中まで伸びているのがわかった。横髪がほおにかかり、彼女の小顔がさらにちいさくなる。

それだけ確認すると、わたしは寝がえりをうち、もう一度目を閉じた。ふたたび逆説睡眠のなかにおちていく。

うつすらと、背後に掛け布団のこすれる音がする。エリリの空気とあわい存在感が耳たぶにふれた。そこでわたしは、唐突な覚醒感によって目を覚ました。

「西江さん」

背中ごしに抱きよせられる。彼女の吐息に、わたしは身を硬直させる。パジャマのすそがずれて、エリリの指がくるりとお腹をなぞった。首筋がぞくぞくとふるえる。

「このまえ、クロキさんのことわるく言ってごめんね」

わたしは、寝たふりをとおした。

「だって西江さん、クロキさんに憧れてるっばかったもんね。あたしにも見せたことないくらいいい笑顔でさ。あんなの、ぜったい嫉妬しちゃうよ」

嫉妬、嫉妬、と頭のなかでくりかえす。

「あのあと、ブルーベリーと土壌のはなししてくれたよね」声が湿って聞こえた。「あたし、ブルーベリーに共感しちゃったんだよ。気づかなかったでしょ。土壌のはなしなんて興味ないふりしてたもんね。ねえ西江さん、どうしてだろうね」

エリリの指が、わたしのお腹をつまむ。皮がよじれ、ビリッ、と全身までしびれる。

「起きてるんだよね、ほんとは」

わたしは、それでも寝たふりをつづける。首もとに、水気を含んだ息がかかる。空気の流れと布団のこすれる音で、わたしは目を閉じたまま、周囲の光景を想像した。その結果、エリリは上半身をおこして、わたしにおおいかぶさるようにしているのだとわかった。

下唇に、濡れたものがくっついた。なぞるように唇の上を推移していく。それは舌だった。

「好き」声は直接、わたしにふれていた。自分自身をたしかめるように彼女は言った。「あたし女だけど、西江さんが好き」

上唇をなぞられたあと、舌は前歯のあたりまで侵入してきた。もうだめだと思ったころ、エリリの動きがとまった。数秒間固まって、唇がはなれた。

どうやら、わたしは泣いてしまっていたようだった。エリリがはなれた瞬間から、ちいさな泣き声まであげていた。どうすればいいかわからなかった。もう一回寝たふりをすればとも思ったが、どうかんがえても手遅れだった。わたしは枕に顔をうずめ、わけもわからず出てくる涙を必死にこらえた。

エリリの立ち上がる気配を感じとる。

「ごめん……」

それをさいごに、彼女は部屋から出ていった。

図書館裏のブルーベリーと同じように、うちのサボテンも、土の植え替えをしてあげることにした。梅雨にはいる直前のこと。雨がつづくと、そのぶん太陽光がよわり、空気もしめり、サボテンが生きていくには困難になる。そのまえに土を替えて肥料を与え、つらい季節をしのいでもらうというわけだ。わたしがサボテンの植え替えを思いついたのは、まさしくちょうどよい時期だといえた。

クミカからもらった当時の鉢より二倍は大きい駄温鉢を倉庫からえらんで、底に防虫ネットをしき、ネットに少量の土をふりまいた。古い鉢からサボテンをはずす。以前のように土をおとし根っこを散髪した。駄温鉢にサボテンを入れ、根をやさしく広げる。ちよつとずつ土をかけて固めていく。土は多肉植物用のものをつかい、そして緩効性の化成肥料をまぜてあった。

わたしはサボテンについて考える。サボテンは生長のおそい植物だ。人間みたいに体のほとんどが水でできていて、まるで天然の水タンクのように。ほかの草木のように頻繁に水やりをすれば、キャパシテイオーバーですぐにおぼれてしまう。日本の冬じゃさむすぎて、中身からごえてしまう。暑さと乾燥につよくて、つらい環境でなければ満足しない双子葉植物綱。サボテンに花を咲かせるなら、とにかく厳しく育ててあげることだ、なんて迷信まである。

肥料について考えた。そんなサボテンでも、肥料は年に一度は与えたほうがいい。土にほんのすこし、まぜるだけでいい。

植物にとつての土とは、人間でいうところの社会のようなものだと、わたしはそう思う。わがもの顔でずぶとく見えるサボテンにだって苦手なものはある。ときは甘い蜜、肥料がほしくなるときがある。ひからびた大地に合わせるだけじゃ生き地獄にひとしい。ただ厳しくすればいいだなんて、そんなの、生きものにたいする接しかたじゃない。

だから、と思う。エリリには悩みなんかないだろうな、なんてわたしのかんちがいには過ぎなかった。わたしがいなくても大丈夫だなんて、友だちがいっぱいいるからうらやましいだなんて、ただの妄想だった。彼女はだれからも理解されない土のなかでじつと耐えてきた。肥料もあたえられず、くるしいはずの水を必要以上にのまされてきた。エリリだけにさだめられた、適正のやすらぎがそこにはあつたはず。

クミカのとくと逆だ。わたしはクミカに与え、求めすぎた。ほんたいにエリリには、与えなさすぎて、求めなさすぎた。これで友達だと言いはっていたのだから、わたしってほんとうバカだ。もうひとつやりようつてものがあつたはずなのに。

でも、わたしにはどうしていいかわからなかった。いままで積み重ねてきたつめの甘さがここであらわれた。わたしには、決定的な解決策がぬけていた。

それから、エリリと顔を合わせることとはほとんどなくなった。もともと学部も違ったし、共通で履修できる科目にさえ出なければいいだけのことだった。わたしは、在学生二万人の影にエリリが埋もれていくさまを思いうかべた。

あのときをことを思いだすと、いまでも呼吸がくるしくなる。それ以上に痛むのは胸のほうだった。わたしは結局、エリリを避けてしまったんだ、って。

古本屋の店頭で、エリリが立ち読みしているのを見かけたことがある。エリリと教授の本を買いにでかけた、あの古本屋。あれからもう半年が経っていた。空はいまにも雪が振り出しそうで、空気を切るような冷気が街じゅうをつつんでいた。彼女は店先にならべられた雑誌を手にとり、たいくつそうに瞳をうごかしていた。ツールがしょんぼりと垂れ下がり、ときおりやってくる風にゆらされた。

わたしは声をかけようとした。ほぼ無意識的にだった。だけど、それはすんでのところでは抑えこまれる。やがてやってきたエリリの友だちを認めたとき、わたしはコートのポケットに手を差し入れ、したを向いた。

じつと、霜のはった街路樹の土を見おろした。

scene 20：ゆりちゃんと温泉旅行

高速を抜け、一般道を車で数十分。二月のある休日のこと。わたしは、ゆりちゃんと二人で温泉街へとやってきた。

いくつもの源泉やぐらが建ち、町じゅうに白い湯気がもつもつと立ちのぼっていた。それらを取り囲むように、古めかしい湯宿群がならぶ。山間のセイレンな川の流れに沿うように、ゆりちゃんの運転する車はしずかに温泉郷へとはいつていく。試験後の徹夜明けだったわたしは、そのおだやかな空気の変化にようやく目を覚ましていた。

ガラスごしの町並みを見る。杉皮葺き屋根と黒いカベの湯治場に、わたしは目をかがやかせる。

「すてきなところだね、ゆりちゃん」

「町情緒あふれるってやつね。麻衣がはじめてここにきてから、もう十年になるんだねえ」

わたしは十年前を思いおこす。そのときも、ゆりちゃんと二人つきりでここへやってきた。わたしは九歳で、ゆりちゃんは三十一歳。ぼつり、とわたしはつぶやく。

「そう、そっか。十年、ジユウネン。もうジユウネンになるんだね。なんだか、つい最近のことのようだよ」

「やだ麻衣ったら。おばあちゃんみたい」

バックミラーに、ゆりちゃんの苦笑がうつった。

ゆりちゃんとわたしの関係に歴史年表をつけるとしたら、最初の四年間は『冷戦こうちゃく状態』だったはずだ。わたしたちは、はじめから仲よしこよしの義理母子だったわけではない。

ゆりちゃんはお金持ちのお嬢さま育ちで、しつけには堅い固定観念みたいなものをもっていた。なので、どうしてうちの野蛮なお父

さんなんかと結婚してしまったのか、それはわたしの中ではイースタ―島より大いな謎となっている。

概してわたしも、お父さんゆずりの不作法かつ無教養な子供であった。出したものをしまわない。お菓子を食べちらかす。扉やフタをしめない。気に入らないことがあるばすぐに暴れたり、大声で泣きわめく。そういう、どうしようもない子供だったらしい。

その上わたしは人見知りだった。とつぜんやってきた見知らぬ義母と義兄の登場はわたしを混乱させ、無愛想さ具合をさらに増長させた。

涼二はノーテンキのお気楽くんだったので、新しいペットでも飼うように仲良くなれた。でもゆりちゃんは、わたしにいつさい慣れしてくれなかったし、わたしも慣れようとしなかった。

わたしがいつまで経っても『おかあさん』と呼ばなかったのは、ゆりちゃんを余計いらつかせたようだった。ねえ、とか、あのう、としか話しかけられなかった。

「麻衣って、お父さんに似てないよね」

たびたび、そう言われることがあった。すごくイジワルっぽく。

もつとひどいとき、ゆりちゃんの機嫌がわるいときなどは、

「麻衣はおかあさんに似てるのよね。もう死んじゃったおかあさんあたしにとつちや居心地わるくてかなわないよ。あんた、この家の子じゃないみたいだもん」

そうやって、お父さんのいないところを見計らって言うてくるのだ。

わたしがソロバン塾の帰りに万引きしたときもそうだった。七歳のあの日。ゆりちゃんが泣きながらわたしをたたいて、家からしめだしたことは、単なるしつけ意識からではなかった。じっさいゆりちゃんに、義理とはいえうちの子だと思つと、恥ずかしいわけないわで……とイヤミっぽく説明された。

むかしのことを思い出すと、今でも胸がちりちりしてしょうがない。いまのゆりちゃんとの関係をおもつと、当時のことは異国紛争

のとおい出来事のように思えた。

旅館につくと、二人ぶんの重い荷物をあずけて、さっそくゆりちやんと温泉街観光に出かけた。

温泉成分たっぷりなトロトロたまごを食べて、まんじゅう屋さんでおやつのお茶まんじゅうを買った。

内湯めぐりなるものがあつたので、わたしたちも参加することにした。受付で手荷物をあずけ、『通行手形』をもらった。十数軒の浴場を開放してくれるという、とてもすばらしい手形である。

湯の花がうかぶヒノキ造り温泉、リスが見られるかもしれないという野天温泉（さんねんながら発見できなかった）、大正ロマンあふれる洋館風の室内湯、タイル張りの露天風呂、日本庭園をのぞみながらの岩風呂、計五つ、バリエーションゆたかな内湯めぐりだった。

手形のスタンプもたまり、受付で記念品の下駄をもらった。旅気分につかされたわたしたちは、下駄をばかばかと履き鳴らしながら旅館へとむかった。

道中、ゆりちゃんがわたしのほつぺたをつまんで、「お肌、だいぶ良くなってきたんじゃない？」と言った。

そう、わたしは定期試験に向けた猛勉強と夜ふかしで、お肌荒れまくりだったのだ。美肌とりもどし計画。この旅行のひとつの目的である。

わたしは自分の顔をさすって、ちょっとだけね、とはにかんだ。

scene 21：風呂敷の発想

宿泊先の旅館は、あらかじめ誕生日プランで予約してあった。海鮮料理のあと、デザートでケーキワンホールと赤ワインのボトルが用意される。わたしはまだ未成年なので、瓶のオレンジジュース。部屋を暗くする。仲居さん（かっぶくのいい優しそうな女性だ）がロウソクに火を灯してくれる。

照れくさい思いで、ふーっ、と息をかける。ぱらぱらと拍手がおこった。

「お父さんと涼二が来れなかったのは残念だったね」とゆりちゃんが言う。

「ううん。じゅうぶんうれしいよ。ありがとうねゆりちゃん」

お父さんは取材で出張しているし、涼二は公務員試験を控えたたいせつな時期だ。それぞれ事情というものがある。わたしもオトナな考えかたができるようになってきた。

「麻衣も、もう十九歳かあ」

部屋を明るくしたあとゆりちゃんが言った。わたしはうなずく。自分でも不思議だった。もう十九歳。

ケーキはすごく甘かった。背骨がとけちゃいそうなくらい甘かった。十年前もここで同じケーキを食べたはずなのに、あのころはぜんぜん味なんてしなかった。

「お客さまがた、ご入浴はこれからですか？」

仲居さんのしゃべりは東北のなまりが混じっている。口をもぐもぐさせるわたしたちに、食べながら結構です、という仕草でせりする。そして風呂敷を二枚、畳のうえに並べた。紅色とオレンジ色の、『ゆ』と書かれた二枚の風呂敷。

「お外の露天風呂はさむいので、これをぜひ脱衣所でお使いください」

「脱衣所で？」とゆりちゃん。

「ええ。床は板張りですからね、よく冷えているんです。この風呂敷を板に敷いて、そのうえでお着替えになるとよいでしょう。脱いだお召しものもこれにくるんで、なるたけ冷えないようにしてください」

ああ、とゆりちゃんはずなずく。この旅館の形式を思いだしたようだ。仲居さんはそれから、風呂敷について熱心に語りだした。

お風呂で敷くものだから風呂敷なのです、と彼女は言う。お風呂以外でも、風呂敷はひろく活用できるのだ、と。あるときは手ぬぐいに、あるときは防寒用に、あるときはお弁当箱の下敷きに、あるときは荷物いれに。

「大は小をかねると言いますでしょう。わたくしはですね、これの語源は風呂敷からきているんじゃないかと、そう思うのですよ。大きな風呂敷は小さなものもつつめますが、小さな風呂敷は大きなものをつつめません。大きな風呂敷ひとつあれば有用性は、ぐう、とひろがります。ひとえにこれが温泉文化であり、古き日本の文化であるのです。それでね、変なことを言うようですが、実はわたくし、お二方に風呂敷の影を見してしまうのですよ」

「わたしたちがですか？」わたしはびっくりする。あとにもさきにも、風呂敷みたいなひとたちだと言われることはないだろう。

「はい。お二人とも、とても大きくすてきな風呂敷に見えますよ。いまのご時勢でお子さまの誕生日のためだけにお祝い旅行を敢行されるお母さま、それに応える健気で謙虚な娘さん。純朴な感覚、やさしく柔軟な発想、ふところの広さ。とつても、風呂敷的だと思います」

わたしたちは神妙に、感じ入るようにお互い目を見つめた。風呂敷的。しんせんと言葉だなあ。

仲居さんの推奨どおり、脱衣所の床に風呂敷を敷いて、そのうえで浴衣を脱いだ。たしかに足は冷たくない。浴衣と下着を風呂敷に

つつんで編みカゴに入れておく。あらかじめ布越しに踏んでおいたせいか、板張りは熱を帯びているようだった。

「ねえ麻衣。世の中にはプラダだのグッチだののファッション性重視のバッグがあるでしょう。バックなんて所詮、お風呂敷さまには敵わないのよ。ああいうのって大概にして容量ちっさいし、背中に背負えないし、こういうのって、柔軟な発想を日本人から奪っていくのよねえ」

まさかブランド大好きなゆりちゃんからそんな言葉が聞けるとは思わなかった。ワインの呑みすぎだろうが、顔がほんのりと赤い。わたしは適当に返事を返しておいた。

時間が時間だからか、露天風呂はひとつこひとりいなかった。湯殿や湯船は、ヒノキと十和田石によってつくりこまれている。

二月の真冬にもかかわらず、濃厚な湯けむりによってさほど寒気は感じなかった。もしここで記念撮影しても、湯気のせいでうまく映らないだろうなと思った。

せーの、でゆりちゃんといっしょに湯船につかる。肩までゆつくりとつかる。うちがわにあったものが、ぜんぶ外に出て行く感じがした。湯気を思いつきり鼻から吸いこむ。温泉の成分が体のなかに入っていく。

「麻衣、飲泉って知ってる？」

「インセン？」

「温泉のお湯を飲むってこと。効能、滋養強壮が体内まで効いてくるのよ」

「でも、」わたしは抹茶のウイロウミみたいな色のお湯を見おろす。

「ほかのひとが入ったあとだし……」

「だいじょうぶだよ。ここの温泉、自然湧出だからね。循環泉じゃないから、常に新しいお湯が流れてきてるの」

「くわしすぎるよ」

でも、ゆりちゃんがだいじょうぶと言うので、わたしはさっそく飲泉を試してみた。

「どっ？」

「フツー」

くすくす、とわたしたちは笑いあう。こういうとき、わたしは明確なものを感じてしまう。この何気ない瞬間こそが、人生最高の出来事のひとつなんだろうなあと。

他のお客さんがいないのをいいことに、わたしはあおむけになって、ぷかり、と温泉に浮かんでみた。お湯から顔だけが出て、聴覚があいまいになる。髪の毛が海草みたいに湯水にただよるのがわかった。

ゆりちゃんは、だまって見ていた。なのでわたしは仰臥しつづける。スイレンか、もしくはブルー・ロータスみたいに浮かびつづける。

夜空には、わが目をうたがってしまっただけで、きりとした星空がある。星々のきらめきが音となって聞こえてきそう。コンタクトレンズを外しておけばよかったと思った。きっと温泉効果かなにかですごくきれいなギンガムチェックが見られただろう。くやしかった。いまからはずしてこようかなあ。

「麻衣」

はっと我にかえる。湯船の底に手をついて、わたしは振りかえった。

「お風呂からあがったら、誕生日プレゼントあげるからね」

口もとにほほえみを浮かべ、わたしから視線をそらす。そんなゆりちゃんの表情に、わたしは昔を思いだす。十年前の今日、そのときもたしか、ゆりちゃんはこんな顔をしていた。

ああ、と思う。プレゼントって、たぶんあれのことなんだろうな。

scene 22：手あみのお花へアピン

温泉から出て髪をかわかし、肌の調子をたしかめる。脱衣所にはすえおきの化粧水と保湿液があつたので、使つたことないけど、やってみることにした。洗顔をしてすぐに化粧水をなじませる。そのうえで保湿液をかさねる。顔全体にのばしていく。なんとなく、うるおいが持続していく気がする。そして体重をはかる。ふとっもないし、やせてもいない、つまらないわたしの体重。

ゆりちゃんもお肌の手入れをおえて、わたしたちは部屋にもどる。部屋には布団が敷かれてあつた。

ふすまを閉じる。ゆりちゃんは後ろ手にふすまの取つてに手をそえたまま立ち尽くした。

「麻衣、部屋のまん中に座つて」

言われたとおり、わたしは部屋のまん中、二連の布団の中央に正座する。ゆりちゃんに背中を向ける。ときどきする。

部屋の電気が消される。じんつ、と細かい音がして、あたりがまっ暗になる。カーテンの向こうからやってくる星の光。それは窓の四角形を切り取り、膝もとに静謐とふれる。

背後でゆりちゃんの気配。

わたしはじつと待つ。

膝にかかる平面の星明かりに名残惜しさをのこし、ぴたりと目をとじて待つ。

「一度だけ、麻衣のお母さんに会つたことがあるよ」

ゆりちゃんが言った。ただしこれは、さかのぼって十年前のゆりちゃん。そしてわたしは、九歳になつたばかりの西江麻衣だった。

「わたしの、お母さん？」

わたしは問いかえす。ゆりちゃんがうなずいた。

それは九歳の誕生日だった。

涼二は小学校の集団宿泊に行っていて、お父さんも雑誌の取材で、広島へ出張していた。

その日の朝、学習机のうえには白い紙づつみの箱がおいてあった。つつみと箱を開くと、中にはヘアピンが入っていた。ぱっちんどめの、ピンクのヘアピン。手あみのかわいらしいお花がついている。

『お誕生日おめでとう』

添えられていたバースデーカードにはそう書かれていた。それがだれの字なのか、わたしはかんがえたくなかった。

部屋のゴミ箱に、ヘアピンごと紙包みをつっこんだ。

わたしは、クラスのコたちからもらったお菓子のプレゼントをかえ、小学校からかえってきた。家には苦手な義母しかいないことは知っていたし、祝ってもらおうとはみじんも思っていなかった。だから、お菓子を大事に胸にしたまま、すぐさま自室に入ろうとした。

ところが、そこでわたしは呼びとめられる。

「温泉いきたいなあ」

それは直言的に呼び止められたというものではなかった。ゆりちゃんのひとりごとで、知らんぷりできたものだった。けどわたしは無視できない。

どちらともなく支度をはじめ。言葉もなく。おばあちゃんに作ってもらったギンガムチェックの布バッグに、チョコレートと、がま口財布と、替えの下着をいれる。

ゆりちゃんが車をだした。わたしは後部座席にむすつとして座り、ニンテンドーDSであそんだ。

シチュエーションはいまとまるで同じ。

二人の距離感は、ぜんぜん反対。

温泉街に着くころには夜も深まりきっていた。旅館に素泊まりで泊めてもらった。べつべつにお風呂にはいる。無言でパンとお菓子をかじる。

電気を消し、そろそろ寝ようかという段で、ゆりちゃんが言う。

「一度だけ、麻衣のお母さんに会ったことがあるよ」

わたしは純粋な期待をこめて問いかえず。

「わたしの、お母さん？」

きゆうに元気よく答えた自分にきまりが悪くなり、わたしは口をむすんでそっぽを向いた。部屋は暗かったから、見えなかったかもしれないけど。

「すてきなひとだった。やさしそうなひと。恥ずかしがり屋みたいで、ほお赤くして、あんまり目合わせてくれなかったけど。顔は、そうだなあ、麻衣から子供っぽさ抜いて、ホワイトチョコと煎茶をませあわせたカンジ」

わたしはなにも言わなかった。どうして会ったのか、会ってなにを話したのか。わたしは追求しなかった。あるとき素直にたずねていれば、あるいはもっとお母さんのことを知れたかもしれない。

「あたし、くやしいのよね、たぶん」とゆりちゃんは言う。「あたしは頭ガキンちよだし、麻衣がおかあさんって呼んでくれないのムカつくし、だからあんたのこときらい。でも、せつかく作った仲間おりのしるし捨てられたの、超かなしかったし」

仲間おりのしるし。わたしは今朝のヘアピンを思いだす。ゴミ箱にいたお花のヘアピンを、まぶたのうらに映してみせる。

そのとき、うしろから抱きとめられた。首に手をまわされる。

「あたしがおかあさんの、イヤ？」

わたしは、なにも言えない。

「じゃあ、これからは名前と呼んでよ。お姉さんみたいに思ってくればいいから。あ、もうお姉さんって歳じゃないか。親戚か、近所のおばさんみたいにさ。ね、麻衣」

口をもごもごさせて、わたしはうつむく。

「お姉さん」とわたしはぼんやり言った。おばさんなんかじゃないよって、とりあえずそれだけ伝えたかった。うまく謝れないくせに、そういうお世辞だけは言えてしまうのだ。わたしはそういう、へそ曲がりな子供だった。

「ゆりちゃん」

わたしは、わたし史上もっともちいさな声で言った。消え入りたいくらい申し訳なくて、死んじゃいたいくらい恥ずかしかった。

抱きしめるゆりちゃんの腕に力がこもる。わたしの首すじに顔をおしつけ、ゆりちゃんはかすかにふるえていた。わたしはそっと、彼女へと頭を寄りかけた。

ぱちつ、と音がした。蛍光灯が点滅まじりに白い光をはなち、部屋が明るくなる。わたしはまぶたを押しあげる。過去は閃光によって消えた。そばにはゆりちゃんが座っていた。

そしてわたしは、耳が楽になっっていることに気づく。かかっていた髪にかかるい重みを感じている。ゆりちゃんが手鏡を差し出した。「また作ってみたんだよね。いまの麻衣にはちよっと子供っぽいな。同じのあげるのも迷惑かなって思ったんだけど、その、もしよかったら」

手鏡に映る自分を見る。耳のちょうど上、お花のヘアピンが横髪に留められていた。ピンク色のお花は、ナチュラルテイストに手あみされたものだった。

「かわいい」

「ほんと？」

わたしはうなずく。

「すごく、かわいい……」

ゆりちゃんが覗きこんでくる。わたしは顔をかくす場所がほしか

った。かんじんなところで素直じゃないわたしは、この情けない顔だけはぜったい見せたくなかった。なのでゆりちゃんに飛びつき、胸に顔をうずめる。浴衣がびちゃびちゃになったところで、わたしの知ったこつちやなかった。元気づけるようにわたしの頭がなでられる。

「あのときは、ごめんなさい」

不思議なもので、そのおかげで案外すんなりと言えた。のどにつまっていた氷がすっぽりととれるみたいに。

「捨てちゃって、ごめんなさい……」

ああ、やつと言えたんだなって、胸があつくなる。頭上でゆりちゃん首を横に振るのがわかった。「あたしも……」と、それ以上は押しとどめられた。

髪に手をやり、お花の手触りを何度もたしかめる。コットンのやわらかい感触がした。

scene 23 : あがらない雨

喫茶店で、『週刊春光』のお父さんの記事をながし読む。第32回、50歳のぼやき。よくもこんなにつづくものだと思う。

お父さんは『家族想い』としてのキャラクターを確立していて、読者から寄せられる家庭のお悩み相談もつきない。今週の記事も、わたしが成人したこと、涼二が柄にもなく公務員を目指していることをネタにしている。それについては、もうなんの反抗心もわかない。勝手にすればいいよ、としか思わなくなってしまった。

週刊誌をたたんで、ミルクたつぷりのアイスコーヒーを飲む。喫茶店内で流れているのはオーケストラのクリスタルな旋律。シューベルトのアヴェ・マリア。以前、大学の友だちとここへ来たとき、彼女がおしえてくれた。

「アヴェ・マリアって？」

「マリアさまへのごあいさつだよ。アヴェ・マリア。儀礼的にじゃなく、愛ある信心をこめて」

わたしにはよくわからなかった。日常にはびこる崇高な信仰心は、わたしには理解できなかった。

ガラス窓の外では秋雨が降りすさいでいる。数千の雨粒が風にのり、小麦粉をまぶすように空気を白くする。

これじゃお店から出られないな、とわたしは思う。今日は傘を持ってきていなかった。ちかくのコンビニでビニール傘を買うこともできたが、お金がもつたいないし、買えなかったら買えなかったであちからむかえにきてもらえばいい。

もし、むかえに来てくれなくても、わたしはここでずっと待ちつづける。傘がないなら待ちつづければいい。あけない夜がなければ、あがらない雨もないのだから。

週刊春光の5ページを開いて、既読の記事を読みかえすことにす

る。

そこには、カルト宗教が起こした事件の後日談が載っていた。いま、日本をおおいに騒がせている事件のひとつである。

その宗教法人が起こした数々の暴力行為は、内部告発をしようとした反対者へ行われたようだった。信者からあつめた多額のお布施金で伊豆に道場施設を建て、宗教団体は、そういった反対者を叱責するためだけの隠し部屋をつくった。

警察の調べでは、彼らが行うのはなにも肉体的な暴力だけではなく、反対者や脱会者に対して、脅迫状、怪文書、いたずら電話などの嫌がらせも散見されたという。施設の地下からは十名ほどのミイラ死体が見つかった。その状況から、反対者の一部は拉致監禁の被害にまであっていたのではないかと推測されている。

そうまでして反対者、脱会者に圧力をかけたのは、その背景に、麻薬を用いたイニシエーションが行われていたからだった。信者の食事に幻覚剤を混ぜ、そのうえで修行をする。修行中に神秘的な幻覚を見せることで、より熱心な信奉者にしようというものであった。くるったマインドコントロール。薬物過剰摂取によって、命をおとした信者もすくなくない。

そこまで狂信的な信者をつくりあげて、彼らはいったい何をしようとしていたのだろう。わたしには想像できない。どこかべつの世界の出来事のように思えた。

その記事には、容疑者として逮捕された幹部の実名が載っていた。

教団幹部の實の娘であり、弱冠20歳にして同じく幹部に名を連ねていた市松久美花も、同日13日、例によって伊豆の施設内で会合を行っているところを県警察により逮捕された。久美花容疑者は、件の拉致監禁、薬物使用に関与していたことを全面的に認め
ており

そこで、バッグの中で携帯電話がふるえた。通話ボタンを押すと、

涼二の声が聞こえた。

「おまえなあ、駅前の本屋でおちあうって約束だっただろう。まったくどこにいるんだ」

「だって、傘がないんだよ」

「傘？」

「傘がないから、喫茶店から出られないんだ」

「ああ」涼二は納得する。「どこの喫茶店だ。むかえにいつてやる」十分後、喫茶店の前にまっ白なミニバンがとまる。お父さんのおさがりで、涼二はつねづね「乗りづらい」と不満をもらしていた。わたしはギンガムチエックの布バッグに週刊春光を入れ、喫茶店を出る。雨に濡れるのはたいへん不本意なので、小走りで車へ向かい、いそいで助手席に乗りこんだ。

就職活動の帰りなのか、涼二はスーツを着ていた。着ているというか、ムリヤリ着せられてるって感じだったけど。

「七五三みたいだね」

「そんないい笑顔でばかにされると、こまる」涼二は照れくさそうに言った。「で、どこだっけ」

「東京拘置所」とわたしはこたえる。クミカはそこにいるのだ。

涼二はなにも言わず、わたしの顔も見ず、慣れない手つきでカーナビを操作した。

「だいじょうぶだよ、涼二」

「なにが？」

ミニバンが車道に乗ると、わたしは窓の外を見つめながら言った。

「あがらない雨はないんだよ」

「そうだな、たしかにあがらない雨はない。麻衣、おまえはあれだろう。メタフォリカル的な表現でおれを慰めたいんだろう。けどね、おれがおまえに慰められるのは、ちょっとちがうと思うんだよ。立場が逆ならわかるけれども」

まったくそのとおりだ、とわたしはうなずく。

わたしはクミカのことを思った。頭の中でアヴェ・マリアをなが

しながら。クミカにも、クミカの信じる崇高な神さまがいたのだろうか。キリストの福音のようなものがクミカに訪れたのだろうか。愛ある信心の対価は、はたして得られたのか。そんなことを考える。彼女に会うのは六年ぶりとなる。中学二年生ときケンカ別れしてそれつきりだから、たぶん六年ぶり。

六年という歳月を経て、子供だったわたしたちは、大人になってしまった。堂々とお酒をのんでもいいし、タバコを吸いまくってもいい。選挙になれば投票所への立ち入りがゆるされる。もし犯罪をおかせば、週刊誌の記事に実名が載ってしまう。

あけない夜はない。あがらない雨はない。そして、大人にならない子供はいない。たとえ大人になりきれない子供がいたとしても、わたしたちが生きている限り、それは逃げられないことだった。

scene 24：わたしの友だち

涼二のあとにつづいて東京拘置所の門をくぐる。

面会受付用紙にクミカの名前と性別を記入する。名前を正確に書かないと面会拒絶のおそれもあるらしいので、「市松久美花」とただしく書く。わたしはちゃんと、クミカの名前がどういう漢字を使うのか覚えていた。

整理表を受けとり、待合室に入る。固いソファーに涼二と並んですわる。前方にあるテレビを見ながら、ときおり、その上の電光掲示板にながれるテロップを気にした。

やがて、整理番号が掲示板に表示された。無愛想な係員さんがやってきて「接見時間は三十分以内となります」と説明した。けっこうみじかい。

涼二がわたしの背中を軽くたたく。

「おれは口はさまないから、しゃべりたいだけしゃべりれ」
うなずき、面会室へと向かった。

一つの部屋を大きなガラス窓が両断していた。せまい間取りがよい息苦しく感じる。ガラスのむこう側の机では、職員さんがたくなにパソコンへ目を向けていた。

わたしはパイプ椅子にあさく座りながら、所在なげにあたりを見回していた。ななめうしろの涼二は目を閉じ、腕をくんで黙っている。

クミカが入ってきた。凜とした女性刑務員をうしろにたずさえ、背筋をしゃんと伸ばし、しっかりとした足取りで扉をあける。

中学のころとくらべると髪が長くなっているが、前髪はぱつんのままだった。まるっこかった輪郭が傾斜をつよめ、やけに顔だちを大人っぽくしている。クミカは一度わたしたちにほほえみかけ、

ガラス向かいの椅子に腰をおろした。

「クミカ」わたしはつばを飲み込んでつづける。「ひさしぶり」

クミカはなにも言わない。首をちいさく傾けて、うなずいただけだった。

わたしは頭の中で、今日のためにシユミレーションした話題を引きだそうとした。しかし、それらの予行練習はジャスイであったように思えた。

だってクミカは、ぜんぜん変わってない。いくら顔が大人になっただって同じ。クミカの笑顔を見ているだけで、わたしは幸福なきもちになれる。かしこまった話なんていらぬ。それだけは変わらぬいみたいだった。

二分ばっかし見つめあっていたら、クミカのうしろにいた女刑務員が声を低くして言った。

「お話することがなければ、早めに切り上げさせていただきますけど」

あわてないように、わたしは言葉をえらんでいく。

「いつもなにを食べているの？」

「五穀米とかお魚とか、おしんこみたいなの。お肉はたまにしか食べられないけれど、へんな食べ物はないよ。でも、今日は祝日だからトクシヨクが出た」

声もあんまり変わってないようだ。

「トクシヨクって、なあに？」

「ぜんざいとか、みつまめとか、おはぎ。特別な日だけ食べられるから、トクシヨク。甘くておいしいんだよ。そういう日にしか食べられないから、甘くておいしいの」

知ってる。甘くないぜんざいやおはぎがあるもんか。だけどわたしの口の中は唾液でいっぱいになっていた。なぜだか、無性に甘いものが食べたくなってきた。

それからクミカは拘置所での食事のことを教えてくれた。わたしは熱心に聞いた。食事以外の生活環境には興味がなかったし、聞き

たくなかった。わたしはご飯のことだけに想像をめぐらせ、そのたびによだれをこらえなければいけなかった。

「麻衣ちゃん、へんな顔」

わたしの胸はどきりと高鳴る。麻衣ちゃんって、ひさしぶりに呼ばれた。

あることを思いだす。そういえば、二週間ほど前にクミカ宛てに手紙を送ったはずだった。わたしの近況と、大学であったおもしろい体験談と、がんばってねという言葉をつづった手紙。あとは、クミカからもらったサボテンの写真をそえた。サボテンにはちょうど花が咲いていたので、いろんな角度から二、三枚撮って同封していたはず。

「差し入れの手紙、写真が入ってたの気づいた？」

「うん、花が咲いてるやつね。あれ、私があげたサボテンだよね」

クミカはにこにこして言った。うれしくて、わたしも笑いかえした。

「クミカ、サボテン好きだったもんね。よかったら部屋に飾ってね」

「好きだけど、部屋には飾れないよ」

「飾っちゃだめな決まりなの？」

クミカは首をふった。

「だめじゃないけど、飾れないよ」

「えーっ。じゃあどうして？」

「だって、やぶつちゃったもん」

ななめうしろで涼二が腕ぐみをとき、なにかを言いかけたが、やはり口を閉ざした。

わたしは白くなりかけた思考を正常にとりもどして、おそろおそろ尋ねた。

「なんでやぶつちゃうの？」

「私だって、ほんとうはやぶりたくなかったんだよ。でも、手紙読んだらむかっときたっていうか、きもちわるくなって」

手に汗がにじんできたので、膝うらのストッキングでぬぐった。

手紙に書いたことを必死に思いだす。わたしは笑顔をくずさないように細心の注意をはらう。クミカも、ほほえんだままだからだ。

「わたし、なにかおかしなこと書いたかなあ」

「おかしくはないけど。楽しそうな学校生活とか、なにひとつ不自由していない感じとか？ 私がそういうの苦手なのが悪いんだけど、でもやっぱりムリなんだよね。あとは、やっぱりあれかな。サボテンの花が、私の笑った顔にそっくりだよって書いてあったこと」

「だって……似てるから」

「似てないよ。花に似るわけじゃないじゃん。それに麻衣ちゃん、あなた、私がいまどんなふうに笑うか知らないよね。私たち、もう六年も会ってなかったんだよ」

わたしはクミカの顔を見つめた。昔と今の違いは、わたしにはよくわからなかった。

クミカは口もとの笑みだけをのこして、まっ黒なひとみをわたしに向けた。

「やめてよ、そうやってひとの顔じろじろ見るの。半年も服役してるんだから、ひとからじっくり見られるの慣れてないの。まして実社会に生きるひとからだなんて」

わたしは視線をずりさげて、クミカの胸元まで落とした。灰色のスウェットみたいな囚人服。わたしはその裏側、中学のプール裏で見たクミカの白い肌とブラを思いだした。

「念のため、話しておくけれど」

クミカはせき払いをする。

「私の宗教ね、ひとはみな同じ不幸を共有できるんだ、っていうのが信条だったの。信者ひとりひとりが悩みを打ち明けて、みんなで解決しようってやり方。ほら、宗教って悩みから逃れるための手段でしょう？ あそこは祈りで解決するなんて非科学的な意識はうすくて、どちらかという現実主義だったのね。私、お母さんのコネでいちおう幹部まで上りつめたけど、途中からはからしくなっちゃって。だってそうじゃん。みんな自分のことでせいっぱいなはず

なのに、どうして他人の苦しみまで背負わなきゃいけないのかなあ」
クミカは、こんなに八キ八キしゃべるコだっただろうか。だが彼女
は考えさせてくれるひまを与えない。

「宗教にはまるだなんて、心が弱い証拠でしょう。やっぱり私には
ひつようなかったんだよ。たしかに私の人生は不幸だったかもしれない
ないけれど、ここまで落ちぶれることはなかったんだよね」

クミカはもう笑っていない。感情のない目を手もとの台に落とす
ていた。わたしの唇はからからに乾いている。

「クミカは、ほんとうに、麻薬でひとをころしちゃったの？」

「うん。ころした。まぜる薬の量をまちがえて」
「彼女はまばたきをしてから訂正する。」「わざとまちがえて、ころした。ころそう
と思っころした」

「どうして、ころそうだなんて思っころしたの？」

「脱会者の中に、ヤなオバサンがいたの。私たちの悩みや苦しみな
んで、知っころしちゃないって。私が借金取りに追われたり、お父
さんにいじめられたり、ヤクザに犯されたりしたことも」

わたしの知らない話もまじっている。いや、事実では知っていた。
無粋なニューズ雑誌などでは、クミカの不幸な過去が、いかにも共
感しあわれむように書かれていた。ただわたしに実感がなかっただ
けだった。

「そのオバサン、自分の方がヒドい目にあっころたっころ言うんだよ。人
差し指と中指と親指しかない手とか、かたっころぽしかない目を指して、
いろいろ話してきた。うざかったからあんまり覚えてないけど、と
にかくイヤミな感じだった。それでオバサンね、そんな苦しみを私
たちなんかと分かち合えるわけないって、そう言ったの。証拠にな
にひとつ救われてないじゃないかって。それで、かっころとなっころ、こ
ろしちゃった。いつもの三倍くらい、おおめに薬を盛っころてね」

クミカは息を吐き、おおきく吸っころから言う。

「でも、ころしたあとで気づいたんだ。他人とは不幸を共有できな
いんだなっころ。べっころにオバサンの意見に同意するわけじゃないよ。」

不幸をひとつ取ったって、感じ方はひとそれぞれでしょう。もし、オバサンが指をちよんぎられたり目玉をくりぬかれたときの痛みより、わたしが犯されたときの痛みの方がつよかったとしても、それを証明することはできないもの。人間はシリアルナンバーのついたアンドロイドじゃないんだよ。石につまずいて泣くひともいれば、つまずいたことをネタにして、笑いとはすひともいる。見知らぬ男から犯されることに性的興奮をおぼえるヘンタイ女もいれば、翌日に首を吊る女もいる。まあ、極端な話だけどね」

聞きたくなかった。わたしはほっぺたの裏をかむ。聞かなければいけなかった。

「だから私、もう宗教はキライだよ。よく知りもしないで『ひとを勇気づける言葉』を吐くひともキライ。あのオバサンはやなやつだったけど、あながち間違っではないなかつたと思うな。『辛いのは君だけじゃない』とか、『アフリカがどうのこうの』なんて言うひとたちよりは、ずっとまとも。もうころしちゃったけど、それを気づかせてくれたオバサンには、感謝しないとね」

クミカは、今日いちばんの満面の笑みをうかべた。

わたしは泣きたくなるのをがまんする。どうしてか、クミカといつしよにエゴ委員でペットボトルのふたを洗ったときのことを思いだしていた。わかんないけど、なぜだか思さずにはいられない。

『ねえクミカ、どうしてわたしたち、ペットボトルのふたなんか洗わなきゃいけないんだろう？』

『このペットボトルのふたから、すごいワクチンができるからだよ』

『すごいワクチン？』

『そう。アフリカの子供たちの病気を治すための、すごいワクチン』

『すごいワクチン』
そういうことが、とわたしは思う。そっか、とも思う。見た目でわかんなくたって、クミカは変わってしまったんだな、って。

「いつから、」声がひっくりかえってしまった。「そんなふうになったの？」

「いつから？」

クミカは宙をあおいで考えた。わたしのうしろで、涼二が腕時計を確認する。「あと五分くらいだ」とおしえてくれる。

クミカは視線をあげたまま言った。

「たぶん、私は最初から、根っこのぶぶんがそうだったのかもしれない」

そして、わたしと目を合わせる。

「はじめから、麻衣ちゃんのことあんまり好きじゃなかったし」

わたしはクミカのひとみから目がはなせない。そうだろうな、と納得してしまう自分が不思議だった。それとも認めたくなかったのかも知れない。中二のときだって、言葉は違えど、わたしはクミカから突きはなされてしまったのだ。

「その苦勞してなさそうな感じ、なにもかもが上手くいってるような感じ。なのに、いいひとの仮面をつけて人助けしようとするでしょう。麻衣ちゃんに助けられたものってあるの？ どうせせんぶん中途半端にほっぼって、結局は自分のシアワセの中にこもっちゃうんですよ。ちがうかな」

ノブテルの泣きだしそうな顔が脳裏にうかんだ。利恵のゆがんだ笑みが、エリリのさびしげな横顔がつかぶ。

もしかして、わたしが成し遂げたことなんて一個もなかったのだろうか。自分の無力を盾に、逃げてきただけなのだろうか。こうして誰かの言いなりになって、もう好きにすればって知らんぷりして、そこにある何かからから目を逸らしていただけだったなら。

のどをならして、ふとももの上でこぶしを握る。息がつまりそうになくらい辛かったって、言わなければならぬこともある。

「わたしが苦勞してないって、どうしてクミカにわかるの」

クミカはぴくりと頬をつらせて、わたしを見つめる。

「わたしみたいな甘えんぼうでも、苦しいと思うことはあった。ないひとなんていなんだよ。さっき、クミカが言ったばかりじゃん。自分の苦しみがどれくらい大きいか、他人にはわからないって。わ

たしはたぶん、ぜつたい、クミカより苦しい思いはしていない。それでも、誰かをよく知りもしないで決めつけるのは、クミカだって同じだよ。わたしのこと、もっとよく知ってから、それから言うよ……」

わたしは頭をたれて涙をかくした。ここで泣くのは格好わるいと思っただ。

「知ったかぶりでもいいよ。わたしは、もっとクミカのことを知りたいし、クミカにもわたしのことを知ってほしい」

「そういうのが宗教なんだってば」クミカは押しころした声で言う。「私はもう宗教がキライなんだって、何回も言わせないで」

「宗教じゃなくて、友だち」

わたしは、涙でぬれていくスカートのすそを見ていた。

「幸せとか、不幸とか、もう比べっこしなくていい。神さまもいなくていい。他のなにあつたって意味がないから。そばにいるだけで満たされるから、友だちなんじゃないかなって……」

ぼんやりした目をあげると、クミカの顔色が変わっていることに気づいた。顔を赤くし、唇をふるわせていた。怒っているようにも、恥ずかしくも感じているようにも、泣いてしまいそうにも見えた。

「時間です」

女刑務員がクミカの腕をつかみ、ムリヤリ立ち上がらせる。クミカは大人しくそれにしたがったが、目はわたしをにらんだままだった。

わたしはパイプ椅子を蹴るように立つ。

「そこから出たら、また友だちになつてよっ」

仕切り窓にべったりくっついて、大声をあげる。

「ギンガムチェックの夜空って、クミカは知らないでしょ。わたしが見つけたのは中一の時だけど、まだ誰にもおしえてないんだよ。ゆりちゃんにも、お父さんにも、涼二にだってナイショにした。見るのはすごくむつかしいし、でも、ぜつたいきれいだから、ずっとひとりじめしてきた。クミカにだけは、見せてあげるから……」

クミカは唇をかみ、無抵抗に刑務員に引かれていく。

「だから、クミカがナイショにしていることもおしえてよ。誰にも理解できないこと。わたしもがんばるから、クミカも、がんばって伝えてよ……」

わたしの声はせまい部屋に反響し、吸いこまれていく。そうして、面会室の扉は閉じられた。

scene 25 : ギンガムチェックの夜空

東京拘置所を出たあとのわたしはひどくぐったりして、涼二の運転するミニバンの助手席にうなだれていた。長い道のりを走り、三軒茶屋をこえ、国道246号沿いをすすんでいた。もうすぐ自宅というところで、とつぜん車は横道にそれる。わたしは涼二の横顔に話しかける。

「家、そっちじゃないよ」

「知ってる」

「じゃあ、どこへ行くの？」

涼二は進行方向の一点を見すえていた。ハンドル片手に鼻下に指をそえて、鼻をすすった。

「おれは、これから家出をするんだ」

短く彼は言う。それはおかしな話だった。家出もなにも、もとより涼二は東京のアパートでひとり暮らしなのだから。そしてこの車は、わたしを実家に送るために走っているだけ。このまま家に帰れないと、むしろ家出になるのはわたしの方だ。

「だけどそこまでは、常識的なわたしの解釈にすぎなかった。

「イヤなら降りてもらおう」

「わたしもついてく」

じっさい、わたしはそう答えている。ミニバンは進む。海へと進んでいく。

「ついてっていいんだよね」

「おう」

七年前とおなじ。秋夜の海岸をめざしている。二人で見あげた空を、わたしたちはめざしている。

家出は、ほんとうに不幸にさいなまれたゆえの結果なのだろうか。

家出をネガティブなものだと決めつけていたのは、いったい誰だろう。

いまのわたしだと思う。二十歳のわたしはおそらく、家出をネガティブなものだと決めつけてしまう。わたしは月並みにただしく成長してしまっただから。正常な思考を獲得している。家出娘はなにかしらの希望を持っているとか、自分探しがどうか、命がなんぞやだとか、もう恥ずかしくて言えない。

だからこそ取り戻さなくてはいけない。十三歳を取り戻すのだ。わたしだけじゃない。クミカも、涼二も同様に、いまだからこそ振り返っておくべき地点だった。

この世には、わたしたちを非現実的な世界へとみちびくものが多数存在する。アイドルのコンサート、遊園地、映画館、海外旅行、そして家出。あたらしい自分に生まれ変わる瞬間とは、まさにそこにあった。人間もセミみたいに脱皮できるのだ。

ミニバンは走る。国道246号の現実からシフトし、非現実世界の一般道をひたすら突きすすむ。その先には海がある。

コインパーキングにミニバンを停めて、歩道のあるくこと約十分。海の家々がつらなる浜辺が見えてきた。涼二はネクタイをゆるめる。スーツのズボンをたくしあげ、スタートダッシュの構えをとる。

「競争だ」

わたしはうなずき、ギンガムの布バッグを肩に持ちなおした。

「ようい、どん！」

地面を蹴る。涼二が容赦なく先陣を切った。もはや認めざるをえないことだけれど、わたしごときが涼二の俊足にかなうはずがなかった。いまも昔も。いっぺんたりとも彼の隣に並べたことはない。これはけっして自慢ではない。

暗闇の中に涼二がうもれていく。わたしは不安だった。こんなところまでひとりぼっちになるのは、けっこう不安なものなのだ。

わたしが砂浜に到着するころには、涼二はすでに砂のうえで大の字になっていた。海がゴールなのに、またわたしに無益な勝利をゆるするつもりだろうか。わたしはあきれて立ち止まり、彼を見おろした。

「もう、涼二の勝ちでいいよ」

涼二は寝ころんだままガッツポーズをした。わたしはため息をつき、そばに座る。涼二はスーツが汚れるのも気にせず横になって空を見あげているから、わたしも遠慮せず背中を砂につけた。二人の体で時計の一時二十分くらいを指し示した。

ハンカチで指先をぬぐい、両目のコンタクトレンズをはずす。わたしは夜空に目をこらした。数えきれない、あるいは数える気も失せてしまうほどの星の群。目が不自由に慣れれば慣れるほど、光はぐうんと円をひろげる。その様をよくたしかめた。

人はしばしば因果にとらわれる。なぜ自分はいま、ここでこんなことをしているのか。ほんとうに自分がなさねばならないことなのか。この現象は神さまからの啓示ではないか。日常になんらかの暗示がひそんでいるのではないかと疑い、そこに関連性を見いだし、もっともらしい理由づけをする。心のどこかで、わたしたちは運命や奇跡の存在を否定できないでいる。

たとえばわたしの場合。サボテンの花からクミカの笑った顔を連想する。いまだにお父さんとの仲なおりには卵焼きをつくる。ときおり河原で石を投げて不安を解消させる。都会の星の見られない夜空に安堵する。かつんとなって、こんと落ちる会話。『しいん』と『きいん』の連続性。ブルーベリーの土壌と人間社会の近似。ヘアピンがつなく義母との絆。

そしていちばん頭に持つてくるべき事項が、わたしがいま見あげている夜空だった。視力がわるいくらいで、じっさいにきれいなギンガムチェックの夜空が見えるはずがない。どうしてわたしは、ギンガムチェックの夜空のしたで生まれたなどと思ってしまったのだ

ろう。そこにあるのは、因果からくる錯覚でしかなかったのに。

「ねえ、涼二」

「んー」

「わたしのお母さんに、会ったことある？」

わたしは唇をとじ、つばを飲む。涼二はゆっくりと口をひらいた。「あるよ」彼はつづけて言う。「この空を見るたびに思い出す。麻衣の母ちゃんのこと。曖昧で儂げで、ちょっと子供じみた幻想がまじっているような。よくわからんけど、そういうひとだった」

因果はふたたび形を変えてやってくる。わたしは改めてこの夜空から母の存在を感じている。自分の命の在りどころを認めていた。とても重く、のしかかっけきそうなほどに。わたしにとって因果や想像を思い描くのは案外簡単で、そして、それはわたしの人生に大きな比重を置いていた。

このままでいい。しばらくはそういう風に生きていきたい。

クミカがもどってくるその日まで、わたしは錯覚しつづける。わたしがありのままにいつづける限り、クミカはきつと帰ってくる。

地面に頭を押しつけ、もう一度天をあおぐ。風が吹き、砂塵の巻きあがる音とわずかな波音を耳にする。

まだ、だいじょうぶ。そうして心をふるいたたせる。こうして世界の一部分にとどまれている。わたしには、ギンガムチェックの夜空が見えていた。

scene 25：ギンガムチェックの夜空（後書き）

松嶋です。読んでくださった方々に感謝いたします。最後まで根気強くお付き合いくださり、まことにありがとうございます。

まず、かなり個人的な話になりますが、僕の人生におけるターニングポイントは主人公同様中学一年生の時でした。色々と悲惨な時期だったので反面教師的な意味です。ですが、あくまでターニングポイントであり、きっかけに過ぎません。おかげさな話、年を経るごとに価値観が少しずつ変わっていくような気がします。これを成長と呼べたらいいのですが。

作品について深く言及するようなあとがきは止めましょうと過去の経験から判断しておりますので、これにて簡単にまとめさせていただきます。また次回作でお会いできればうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5672v/>

ギンガムチェックの夜空

2011年10月3日03時11分発行